KANSAI＊OSAKA

文化力

No.132
2019/SUMMER・夏

関西から文化力
POWER OF CULTURE

特集 大阪・関西万博の理念構築に向けての提言
～日本ならではの世界観を～

日本万国博覧会記念基金
EXPO'70基金 2019年度助成金贈呈式

アーツサポート関西
2019年度助成先決定
第5回上方落語若手噺家グランプリ2019優勝者決定

トップインタビュー 企業と文化
伊藤忠商事株式会社 専務理事 社長特命（関西担当）
深野弘行氏

関西北前船研究交流セミナー

平成30年度大阪文化祭賞、関西元気文化圏賞 受賞者発表

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会

表紙：山脇千栄さん（鼓童メンバー）

大阪・関西万博の理念構築に向けての提言
～ 日本ならではの世界観を ～

EXPO 2025の具体案をBIE（博覧会国際事務局）に示す期限が迫っている。「いのち輝く未来社会のデザイン」のテーマの下にどのような理念や世界観を構築し、何をレガシーとして残すのか―。千里文化財団と関西・大阪21世紀協会が協力し、EXPO 2025の理念構築に向けて有志の識者による検討会を設置。座長の中牧弘允氏が提言をまとめた。

大阪・関西万博を考える会
呼びかけ人
中牧弘允（一般財団法人千里文化財団 理事長）
堀井良殷（公益財団法人関西・大阪21世紀協会 理事長）
事務局
久保正敏（一般財団法人千里文化財団 専務理事）
大石なつ美（一般財団法人千里文化財団 理事兼事務局長）
佐々木洋三（公益財団法人関西・大阪21世紀協会 専務理事）

「いのち」を考える万博
～制度から運動へ、「パビリオン」から「アリーナ」へ～

一般財団法人千里文化財団　理事長　**中牧弘允**

はじめに

2025年大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに大阪市の人工島・夢洲で2025年5月3日から11月3日まで開催される。サブテーマは①「多様で心身ともに健康な生き方」②「持続可能な社会・経済システム」であり、コンセプトは「未来社会の実験場」となっている。

それに向けて一般財団法人千里文化財団は公益財団法人関西・大阪21世紀協会の協力を得て7名の有識者（P8）に検討会への参画を呼びかけた。そこで自由に提案し討議してもらった結果、**「熟議マンダラ」**（図1）と**「熟議スパイラル」**（図2）という二つのモデルが抽出された。

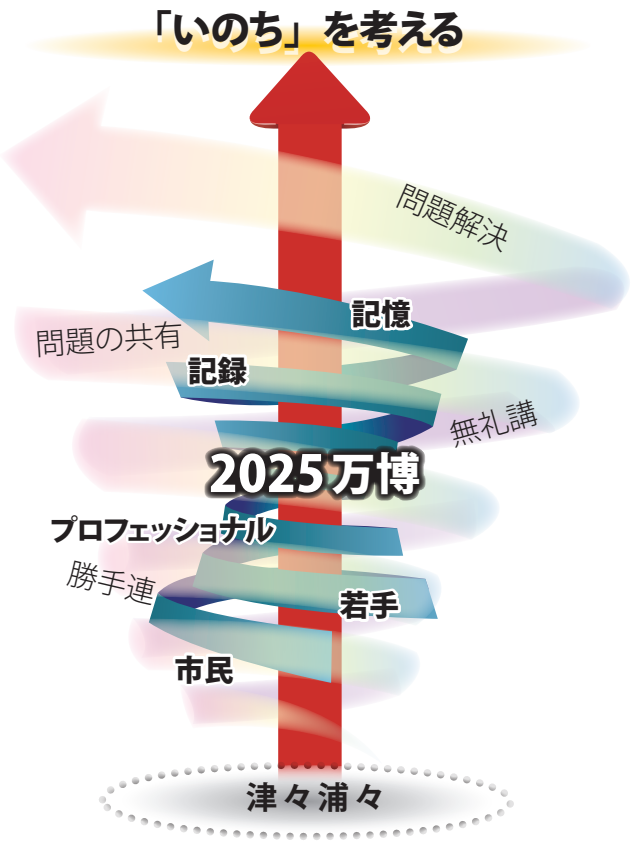
「熟議」がキーワードとなっているのは、日本だけでなく世界中のすべての人びとと共に「いのち」を取り巻く課題について理解を深め、その解決に向けた議論を重ねたい、という狙いにもとづいている。万博という世界最大級のイベントが6カ月にわたって開催されることは政治、経済、文化等にはかりしれない影響力をもつ。しかも、その影響は将来においても長期にわたって持続する。したがって、基本理念をはじめ、会場デザインやパビリオン展示についてもさまざまな観点から、慎重かつ大胆に、熟議を重ねる必要がある。

今回、各有識者から提示された案をいわゆるKJ法（注1）をもちいて全員で分類してみたところ、一種のマンダラができあがった。それを「熟議マンダラ」とよびたい。なぜなら「熟議」の周囲に8つのトピックがあつまり、マンダラで言えば、中央の大日如来の周囲に諸仏が配置されたような格好となったからである。いわば八葉蓮華の風情である。

他方、「熟議」を成長・発展するスパイラルにみたてるモデルもできあがった。多くの人を巻き込み、議論を積み重ねるなかで、だんだん高次元の認識に引き上げられていくという構図である。その収斂する先は本番の万博であるが、万博以後も拡散することが想定されている。これは「熟議スパイラル」と称することができよう。

（図1）熟議マンダラ

（図2）熟議スパイラル



1 熟議マンダラ

1.1.「いのち」

1.1.1.いのち輝く未来社会のデザイン

「いのち輝く未来社会のデザイン」（Designing Future Society for Our Lives）が熟議の焦点である。ただし、日本語の「輝く」は英語に直接的には表現されていない。肝心なのは「いのち」である。25年万博は「いのち」について熟議する万博でありたい。その観点から、<**「いのち」について考える大運動**>が提唱された。全国津々浦々、家庭、学校、会社、町内会、各種サークル等、さまざまな単位で、「いのち」について熟議した経験と記憶、さらには記録を運動として未来社会へと引き継げば、それがレガシーとなる。

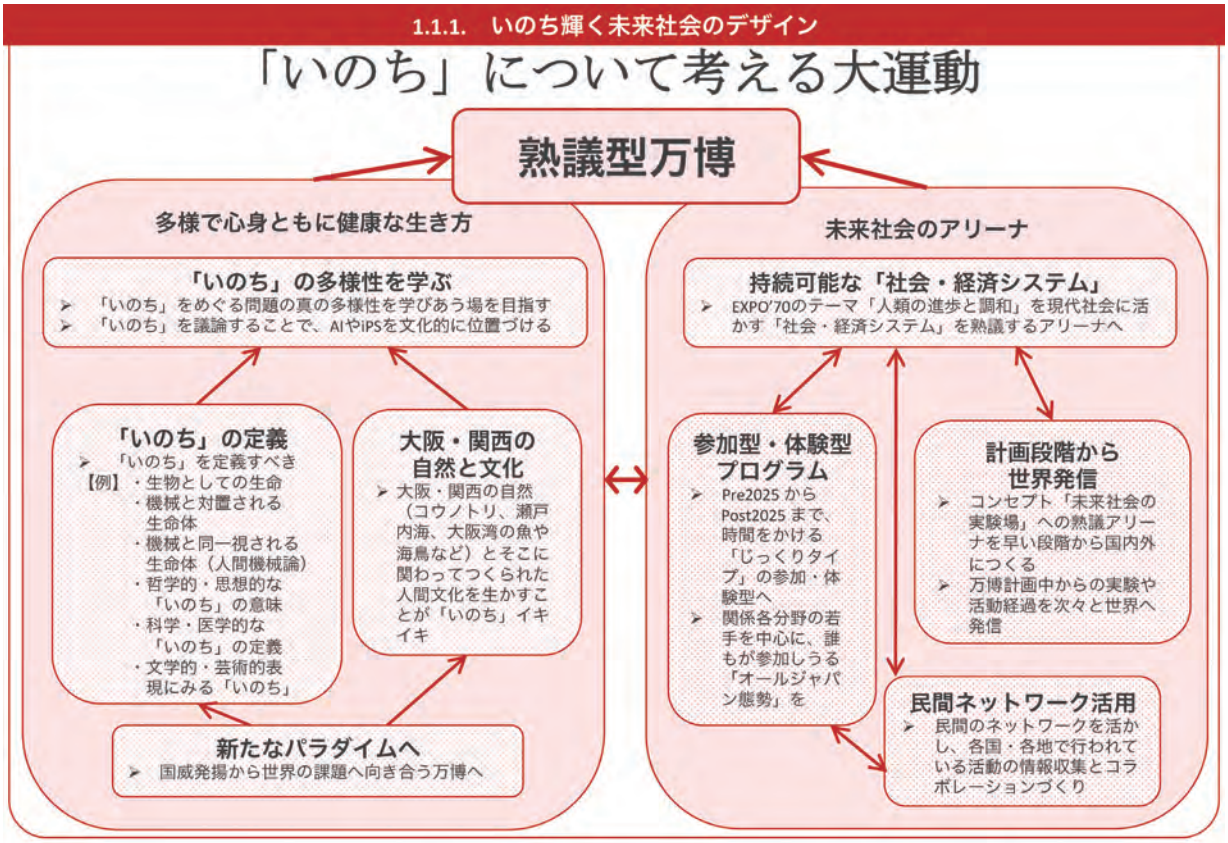
運動とは流動的でダイナミックな過程をさし、固定的な制度に対峙する概念である。制度とは規範にもとづく秩序構造であり、万博も国際博覧会条約に依拠するイベントである。そこにあえて運動の概念を持ち込むのは、確固たる制度として存在する万博に対して、新しい息吹を吹き込むのは運動としての形態がふさわしいからである。

われわれが理想とする運動とは、小さくてもできるだけ多くの企画を打ち出し、国内外のゲストを全国津々浦々に送り込んだり、われわれ自身が学校を訪ねたりして、「いのち」に関する草の根の議論を巻き起こすことである。草の根からはじまり、それがスパイラルとなって25年万博を迎えられれば言うことなしである。モデルを求めるとすれば、第二次大戦後の荒廃のなかにあった日本で、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章の精神に呼応し、全国に広がった草の根の「ユネスコ運動」が想起される。

もちろん「いのち」についてはさまざまな議論がありうる。自然界に生きる生物としての生命もあれば、機械と対置される生命体という見方もある。哲学的・思想的に「いのち」を考察することもできるし、科学的・医学的に「いのち」を定義することも可能であろう。文学的・芸術的表現にみる「いのち」も多種多様である。しかし、結論を急ぐ必要はない。熟成を待つという選択肢もあるはずだ。その上で「いのち」が輝くとはどういう状態をさすのか、議論百出を歓迎したい。

ふりかえると、こんにちの万博は「課題解決型」に舵を切った。科学技術の進歩を競い、国威発揚を優先する19世紀型万博から、20世紀末、世界の抱える問題に向き合う万博へと転換した。世界の課題に関する議論はおおいに奨励されるはずだ。なぜなら、万博は世界の人びとが自由に考え行動するアリーナ（場、舞台）を提供するようになったからである。アリーナは25年万博のコンセプト「未来社会の**実験場**」とも合致する。

<「いのち」について考える大運動>の出発点は「いのち」の多様性に関する認識であり、その目標（到達点）は未来社会へ引き継ぐレガシーである。この間、万博本番に向けての展開には二つの過程がある。一つは「**課題の展開**」であり、もう一つは「**熟議の展開**」である。「課題の展開」とは現代社会が抱える問題群への課題解決型のアプローチである。他方、「熟議の展開」とは**熟議型万博**にインセンティブをあたえ、アリーナを提供し、万博会場でも実践するところの運動過程である。これら二つの過程は相まって万博のレガシーに合流・貢献することになる。



1.1.2.「いのち」の多様性

25年万博では「いのち」の多様性を学び合うアリーナを提供したい。それは国際博覧会条約に謳われる「公衆の教育」という主旨にかなうものである。万博が制度的には啓発の場であり、学びの場であることを忘れてはならない。くわえて、もう一つ忘れがちなことは万博が「万国」を相手にしているという点である。Universal Expositionと言い、World's Fairと称し、全世界を視野に収めていることがポイントである。もちろん個別の万博は開催地が中心となってその時々の世界を表現・演出してきた。科学技術の進歩や国威発揚から問題解決型へとパラダイム・シフトをとげた万博は、グローバルな課題に向き合わなければならない。

今日、「いのち」をめぐるグローバルな課題と言えば、国連がかかげるSDGsが代表的なものである。しかし、それにとどまることなく、現代社会の直面するさまざまな問題に目を向ける必要がある。とりわけ生物多様性や文化多様性の認識が肝要である。なぜなら、「いのち」は科学や医学の立場からは画一的で普遍的であるが、生物学的・文化的にはきわめて多様性に富むものだからである。「いのち」にかかわる文化的な問題の最たるものは道徳であり、倫理である。生命倫理にかかわる問題群も文化的に多様であり、熟議が不可欠である。

1.1.3.未来社会へ引き継ぐレガシー

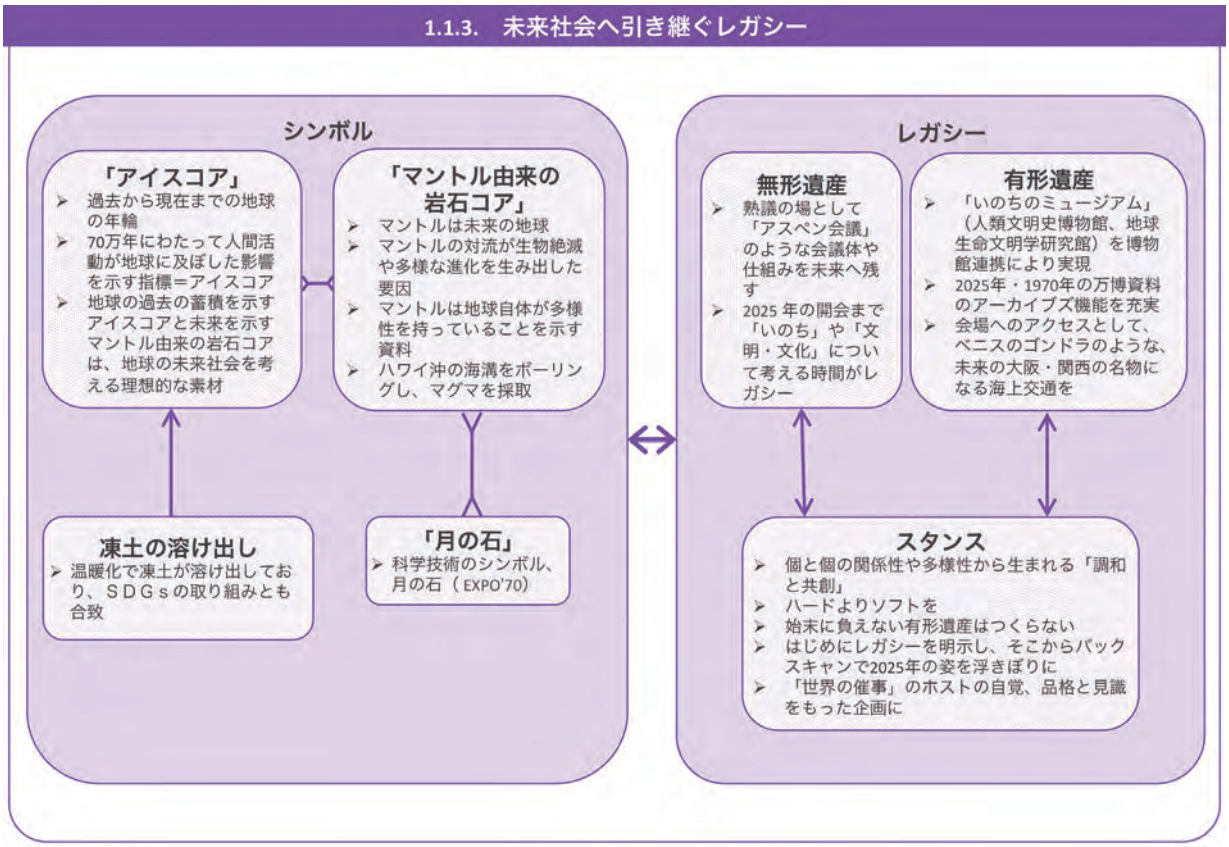
レガシーという言葉はふつう未来へ引き継ぐ遺産という意味でつかわれる。他方、ヘリテージという場合は、過去から引き継がれた遺産という意味合いが強い。語源的には、ヘリテージはたんに引き継がれていくものであるのに対し、レガシーは遺志をもって引き継ぐべきものと定義される。

25年万博のレガシーと言う場合、それは遺志ならぬ意志をもって未来社会に引き継いでゆくものである。万博のレガシーは有形無形の人類の遺産となるものだからである。しかし同時に、仕掛けの段階から後始末にいたるまで、残すべきものを想定しておく必要がある。とくに有形遺産の場合は「始末に負えない」ものをつくらないことが賢明な選択である。

25年万博では、あえて中心をつくらない離散型の会場デザインが構想されている。未来社会のデザインは個と個の関係や多様性のなかから生まれる「調和と共創」としてイメージされている。また、「空」（くう）と呼ばれる大広場を設置することなど、いかにも日本的ではある。

とはいえ、70年万博の「月の石」のような目玉の展示資料があってもよい。その候補として「アイスコア」と「マントル由来の岩石コア」を提案したい。アイスコアは、氷床などで各国が採取している現在までの地球の年輪である。南極のドームふじ基地（国立極地研究所）で採取されているアイスコアは、70万年以上の地球の環境変動と同時に人間活動の影響を示す指標として、極めて重要な研究試料となっている。他方、マントルはその対流が地球環境変動や生物の絶滅

アイスコアの掘削作業（提供：国立極地研究所）



と多様な進化を生み出した要因であり、その一部は地球上にあらわれ岩石となることから未来の地球を示す指標でもある。マントルの上部を取り出す試みが日本を含む国際共同研究で進行しており、マントル由来の岩石採取と分析が進んでいることも指摘しておきたい。

日高山脈アポイ岳に産するマントルから上昇したとされる岩石
（提供：神戸大学海洋底探査センター教授 / センター長 / 巽好幸氏）

オマーン王国で2017年12月に実施された陸上マントル掘削の様子。掘削によって得られた岩石コアは2018年７月に清水港に停泊していた超深部探査船ちきゅうの船上ラボで解析された。（撮影：道林克禎氏）

地球の過去の蓄積を示す凍った「アイスコア」と、地球の過去と未来の一端を示すマントル由来の火山岩から採取された「マントル由来の岩石コア」は「未来社会のデザイン」を考える理想的な素材となりうる。

目玉のもう一つの候補は、日本列島を舞台に人類がいかに自然に順応してきたかを示すジオラマである。日本列島の地質学的・気候学的特異性にもとづく人類の暮らし（住居、土木、治水、農林水産業、冶金、窯業など）を展示することが未来社会をデザインする際の一つのヒントとなるであろう。

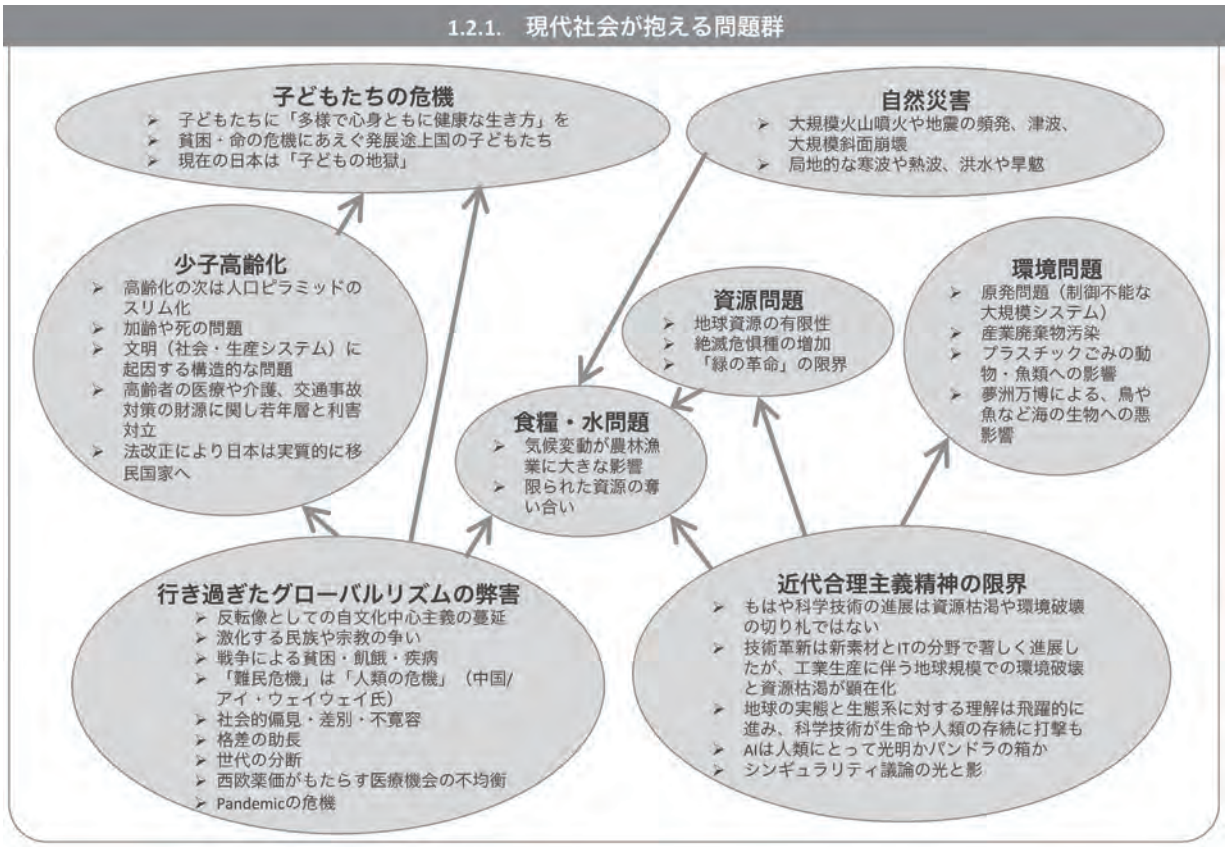
さらに夢を語れば、環境に順応してきた人類の文明史を壮大に演出する展示空間をつくり、来館者に感動と感銘をあたえることが可能である。また、夢のまた夢としては、「いのちのミュージアム」（人類文明史博物館、地球生命文明学研究館）のような施設が将来的に構想されることも検討してよい。

1.2. 課題の展開

1.2.1. 現代社会が抱える問題群

世界が直面する問題群は70年万博の頃とはかなり様がわりしている。当時は東西冷戦下にあり、ベトナム戦争が泥沼化し、アメリカとソ連が覇を競いあっていた。その一方で産業廃棄物による大気圏や水圏の汚染も進んでいたが、局地的・個別的な問題と考えられ、技術的には解決可能と楽観視されていた。また、化石燃料などの地球資源の有限性もほとんど意識されていなかった。地震や火山噴火といった自然災害も少なく、気候も世界的に安定していたため、「緑の革命」のような食糧生産が成功を収めていた。いまとくらべれば、「平穏な時代」であった。

しかし、1980年代以降、気候が激変し、大規模な火山噴火や地震が頻発するだけでなく、局地的な寒波や熱波、洪水や旱魃なども農業に大きな影響をあたえはじめた。原発事故もスリーマイル、チェルノブイリや福島で起こり、核問題の解決なくして人類の未来を語れなくなっている。科学技術の進展が資源枯渇や環境破壊の切り札になると無条件で考える人は現在ほとんどいない。さらに、この間、地球の実態と生態系に対する理解が飛躍的に前進し、科学技術の進歩がかならずしも人類に幸福をもたらすものではなく、かえって生命に大きな打撃をあたえ、人類の存続をあやうくすることがいっそう広く深く認識されるようになった。



他方、社会に目を転じると、東西の冷戦体制が崩壊しグローバル化が進展すると、さまざまな民族問題や宗教問題が顕在化し、多くの難民を生み出す結果となっている。「難民危機」は「人類の危機」であると断言する見方もある（アイ・ウェイウェイ、艾未未）。また紛争地域をはじめとして貧困や飢餓、あるいは疾病に悩む地域が世界的に拡大し、深刻な事態を招いている。グローバル化は同時に格差を助長し、社会に亀裂とひずみをもたらした。そこには社会的偏見、差別、不寛容という問題系もあれば、人間の尊厳、人権、QOLといった課題系もある。そうした状況のなかで、「いのちの安全保障」をはかり、「多様で心身ともに健康な生き方」を世界の人びとと共に考える機会を万博は提供することになる。とくに社会的矛盾のしわ寄せに苦しんでいる難民やマイノリティー、あるいは子どもや高齢者などにとって「持続可能な社会・経済システム」をどうすれば実現できるかを世界中のあらゆる年齢層の知恵を結集して真摯に問うことが求められる。

いのち輝く未来社会をデザインする場合、とりわけ加齢や死の問題を避けて通ることはできない。たとえば、日本と韓国は少子高齢化の点では世界のトップランナーである。そのため、高齢者の医療や介護、あるいは交通事故などへの対処法や財源に関して、若年層や壮年層との利害対立が激化している。しかし、これは文化（人びとの生きる姿勢や価値観）の問題というよりも、文明（社会・生産システム）に起因する構造的な問題である。まさに「持続可能な社会・経済システム」に直接つながる問題と言えよう。とはいえ、文化的課題としては「老年哲学」のような未開拓かつ未熟な段階にある思想や価値観こそが、来る25年万博のメインテーマとなってもおかしくはない。

以上、現代社会が抱える問題群を点描してみたが、その原因は二点に集約される。一つは「行き過ぎたグローバリズムの弊害」とその反転像でもある「自文化中心主義」であり、もう一つは「近代合理主義精神の限界」である。前者は民族・宗教・紛争・難民・貧困問題をはじめ「少子高齢化」や「子どもたちの危機」などさまざまな社会問題をおこしている。対して後者は、AIやゲノム編集に代表される技術を開発する一方、さまざまな「倫理問題」「資源問題」「環境問題」「自然災害」等を誘発している。しかも、両者に起因するところの安定的な食糧資源や安全な水資源の問題は人類に生存の危機をもたらしている。

1.2.2. 課題解決に向けて

「いのち」をめぐるいくつかの問題例をあげてみたが、世界が抱えるさまざまな問題群に対して万博はどのような役割を果たしうるのか。換言すれば、万博はどのような「仕掛け」をつくって、課題解決をめざすのか。ここではとくに「熟議型万博」に焦点を絞って展望を述べたい。

まず「問題解決へのヒント」を見いだし、それを大小さまざま、全国津々浦々、場合によっては海外にも出向き、「熟議」することである。当然、各種の「反対論」も予想される。それをも包摂しながら熟議を重ねれば、いろいろな活路が開かれるはずである。

さらに万博でこそ可能な方法として展示がある。展示をとおして課題を発見し、ともに考える場をつくることが十分可能である。従来、ともすればパビリオンのプロデューサー（建築・展示）に依存しがちであった展示を「熟議」を通じて共有化・具体化していく過程をとれば、段ちがいの成果が得られるであろう。子どもや高齢者の目線、地方や地域の目線、女性やLGBTの目線、難民や少数民族の目線などさまざまな観点から検討を加えることができるはずである。さらに国内にとどまらず、外国からの人材に道を開くこともありえよう。

また、「いのち」をめぐる問題についてたがいに学び合う場を万博会場内に設けることもできるはずだ。「いのち」にかかわる語彙を国連公用語にとどまらず、あらゆる民族諸語から選び出し、翻訳し解説するだけでも、その多様性から異文化における死生観・世界観にふれることができよう。国連の枠組みを越えることができるのも万博ならではの試みと言える。

肝心なことは、準備の段階から若手を含め「オールジャパン態勢」をつくってゆくことである。

1.2.3. 日本モデルの提示

大阪の万博会場には日本をモデルケースとする「熟議」された展示があってもよい。たとえば、先述したように、日本の地質学的・気候学的特異性と縄文時代以来の自然適応特性を示すジオラマ展示を会場に設けたとする。そのうえで全国にあるジオパーク（現在44カ所、2025年には60カ所以上）や重要文化的景観（現在64件）に誘導すれば、より具体的な理解につなげることができる。とくに外国人の場合、母国での伝統的生活の再評価をうながし、「持続可能な社会・経済システム」の構築につながる可能性が高い。会場からジオパークへといざなうことは「熟議」の発展系と言えるかもしれない。あるいは共創モデルのきっかけともなろう。日本モデルの提示は共創モデルの創造に貢献してこそ意味があるからである。

同様に、縄文時代以来の日本の食をテーマに「いのち」について考える場を提供することもできる。世界文化遺産となった和食は、地域や季節によってとれかたが異なる多様な食材（野菜や魚介類）を少量摂取する点に特徴がある。伝統的な和食は農林水産資源の地産地消サイクルと徹底有効活用、廃棄物の自然界へのフィードバックから成り立っている。土壌破壊や地下水汚染を引き起こす大規模な単一品種栽培農法とは対極に位置し、生産に要するエネルギー効率が悪く高カロリーの食生活とも一線を画している。和食を体験した外国人来場者をグリーンツーリズムにいざなえば、食を通じて人類共通の価値観とともに文化の違いに気付き、相互理解を深めることができるであろうし、母国での食資源の生産・流通・消費システムを見直すきっかけともなり、「多様で心身ともに健康な生き方」を実現していた伝

統的な農林水産業を再評価する契機ともなりえる。

さまざまな（現代）アート作品（絵画・インスタレーション、演劇・短編映画など）をつうじて熟慮・熟議できる場を設けることも重要である。最初に具体的な情報を提供するのではなく、アートという表象を出発点として、議論を重ねることで具体事例が導かれ、理解が進み、さらなる思考をスパイラルに深めることを狙うことができる。

祭りや儀礼もまた多様な世界観・死生観や対処法を例示する機会となる。たとえば、世界各地でおこなわれている死者の追悼や葬送の方式を紹介することで、生と死の循環に関する認識を深めることができる。

たとえば大阪・関西に限って言えば、上方の歴史や文化に根ざした伝統芸能（人形浄瑠璃や上方歌舞伎）を関西発の先端技術（バイオ、セラミック、ロボットなど）と結びつけ、世界に向けて披露することで、新しいレガシーを生み出すことも夢ではない。

以上のように、芸術作品には展覧会のような場をあたえ、音楽や芸能には演奏会や公演会のような舞台を提供すれば、観覧者にとってはエンターテインメントともなり、一石二鳥の効果を生む。

エンターテインメントは万博の大切な要素である。多くの来場者にさまざまなエンターテインメントを提供することが万博成功の鍵を握っている。エンターテインメントは「娯楽、演芸、余興」（広辞苑）とあるが、人間の五感や認識に心地よく受容されるものであれば、広義のエンターテインメントと言える。「ホモ・ルーデンス」（J．ホイジンガが提起した人間・文化観。「遊ぶ人」の意）は万博のようなイベントではもっとも参考となる概念である。また、そうした点については、面白さを追求する知的空間を創出し、社会に貢献しようとする博物館学等の経験や知識から学ぶことも多いはずである。

1.3. 熟議の展開

1.3.1. 熟議万博へのインセンティブ

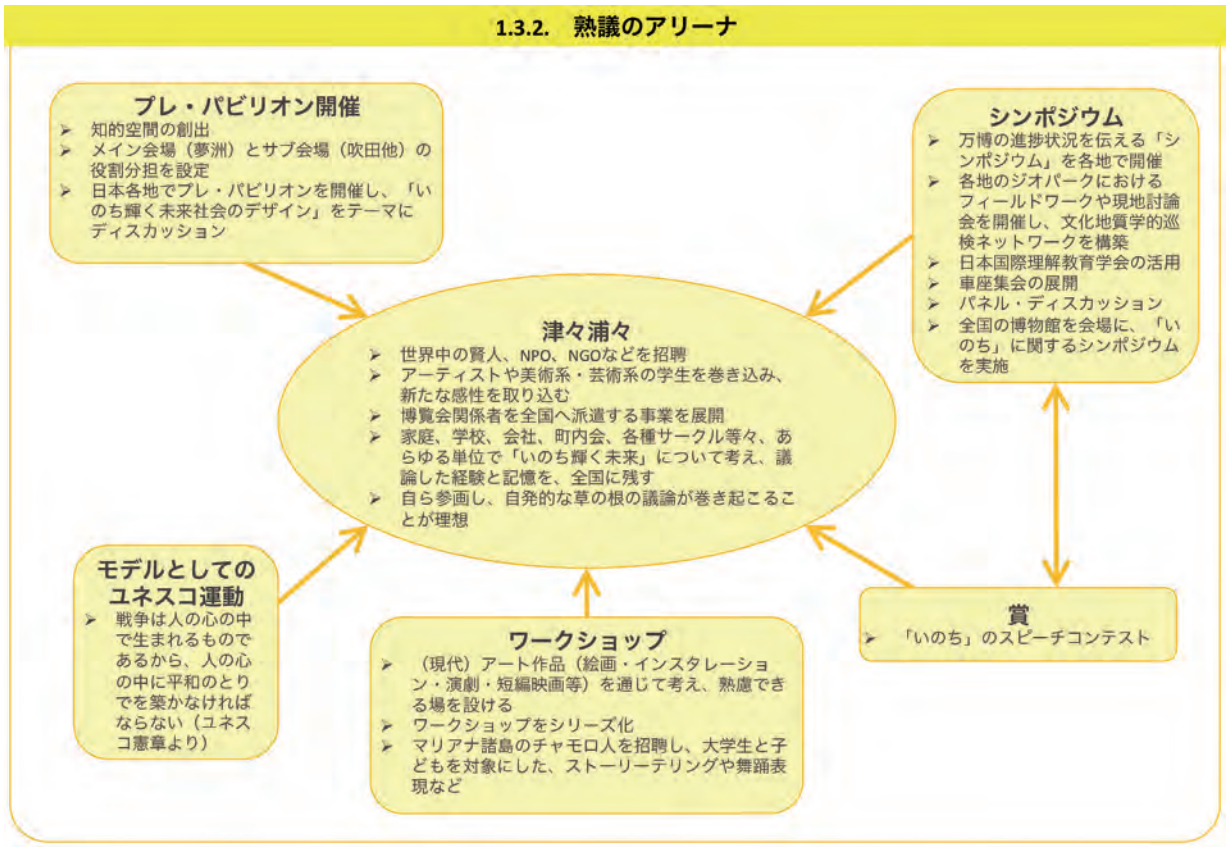
「熟議万博」にむけて各種の助成事業が始動するとはずみがつく。いのちや医療をテーマに取り上げる学会やNPOなどの組織に助成金を出し、万博後にも知的財産や制度が各組織体に残るようにする。市民や企業など「民」の力で練り上げる研究会に助成することも有意義である。また、「いのち」を考える万博を教育内容に取り入れる教育関係機関を対象とした助成を考えてもよい。その場合、人材の派遣、プログラムの提供、教育実践の募集、成果の表彰などを考慮する必要がある。さらに幅広い活動団体、医療支援団体、NPO、NGOを視野に入れることも重要である。

1.3.2. 熟議のアリーナ

討議の形態には車座集会をはじめブレーン・ストーミング、パネル・ディスカッションなど種々あるが、代表的なのはシンポジウムとワークショップである。<「いのち」について考える大運動>には熟議が欠かせない。

万博の途中経過を報告しながら、来場者とともに万博を作り上げていく活動は、万博が動いていることを内外に示すよい機会となる。日本博物館協会などに働きかけ、全国の博物館を会場に「いのち」に関するシンポジウムをおこなうこともできよう。

25年万博開催の2年前に「プレ・パビリオン（仮称）」を



開催し、多様な国や地域の人びとを招聘して、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、本メンバーそれぞれの得意分野を生かしたワークショップを開くのも一案である。開催場所は大阪にこだわらず、メンバーが動きやすい場所で実施する。たとえば、帝京大学で開催の場合は、マリアナ諸島のチャモロ人を招聘し、大学生と子どもを対象としたストーリーテリングや舞踊表現などをつうじて「いのち輝く未来社会」を考えるワークショップが可能である。

メンバーが活動する学会で「いのち」を考える万博をテーマにシンポジウムを開催することもできる。日本国際理解教育学会の場合、「人類の進歩と調和」から「いのち輝く未来社会のデザイン」を教育・国際理解教育の視点から熟議することができる。あわせて分科会を設け、教育実践の共有をおこなえば、さらに豊かな成果が得られるであろう。

1.3.3. 多元的な会場

メイン会場の夢洲はいくつかの深刻な問題をかかえている。まず、鳥や魚をはじめとする生き物への直接の害が想定されていて、日本野鳥の会は絶滅危惧種への影響を指摘し、反対声明を出している。また、国内外の公的な生物学系研究機関もこの万博に関与しにくい。くわえて愛鳥財団をもつ企業も同様の態度をとる可能性がある。

埋め立て地である夢洲の脆弱性に関してはこれまでも指摘されているが、南海トラフ地震はもとより、2018年の台風や高潮の経験を十分にふまえた対策を講じることが必須である。

夢洲をメイン会場とし、周辺にいくつかのサテライト会場を設ける案が浮上している。その一つの候補として、70年万博のレガシーである千里万博公園があげられる。ここはインフラ等もある程度整備されており、自然ゾーンを維持しながら、文化ゾーンにおいては既存施設の改修や増築などに着手しやすいと考えられる。

千里万博公園だけでなく、上野公園（内国勧業博）、沖縄海洋博公園、つくばエキスポセンター、愛・地球博記念公園など博覧会の遺産を活用することも検討に値する。さらに、博物館などの既存施設やエコミュージアムを含む町並みを活用した多くのサテライト会場を設けることもできよう。場合によっては、海外の万博会場跡地をサテライト会場としてつかうことがあってもよい。

2 熟議スパイラル

熟議マンダラは上から俯瞰した二次元の構図であるが、熟議スパイラルは横から見た三次元の構図である。これは草の根の運動をイメージさせ、全国津々浦々、プロフェッショナルから市民まで、老若男女の多くの人たちを巻き込んで展開する渦巻きに表象される。それは勝手連であってもよく、時には無礼講となってもかまわない。しかし、肝心なことは、記憶に残り、記録にとどめられる熟議を重ねてゆくことである。

たとえば、早い段階から博覧会の関係者（行政、デザイナー、イベンター、研究者、パフォーマーなど）を国内各地の学校や教育施設、博物館、美術館、図書館などに派遣し、「いのち」を考える万博についてともに熟議する集いを広げてゆく。自治体にプレ・パビリオンの開催費用を提供し、「いのち」とつながる何かを構想するイベントを開催してもらうことも一案である。

大阪・関西には他地域では考えられないくらい万博熱のある人が多く、そうした人びとを「いのち」を考える万博に向けて巻き込んでゆくことも大切である。

3 70年大阪万博からの遺産（ヘリテージ）

1970年大阪万博の遺産は多岐にわたり、千里万博公園、太陽の塔、EXPO'70パビリオン、国立民族学博物館、万博基金、国立国際美術館など枚挙に暇がない。しかし、「人類の進歩と調和」の基本理念にまさる遺産はない。その結びで謳われたのは次の文言である。「20世紀は偉大な進歩の時代であるが、同時に今日までは苦悩と混乱を避けることができなかった。私たちはこの世界を、完全な平和が支配し、真に人類の尊厳と幸福をたたえうるところのものとして、次の世代につたえたい。この万国博覧会が、そのようなよき時代への転回点として役立ち、その場所と機会を提供しえたとするならば、私たちの光栄はこれに過ぎるものはないであろう。」

4 25年大阪・関西万博の遺産（レガシー）〜有形遺産から無形遺産へ〜

70年大阪万博の基本理念を引き継ぎ、あらたなテーマ（いのち輝く未来社会のデザイン）と基本理念（熟議マンダラ）のもと、2025年大阪・関西万博を次代に引き継ぐアリーナにしたいと考える。

25年万博の終了後、多くのパビリオンは解体・撤去される。埋め立て地の舞洲に残留させる必要はない。むしろ、その精神を受け継ぐ熟議の場や、問題解決のための組織体や制度が形成されるならば、2025年大阪・関西万博の貴重なレガシーとなるであろう。

熟議型の場を提供する団体の一つにアスペン研究所（注2）がある。25年万博後にアスペン研究所が主宰してきた「アスペン会議」のような機能を果たす継続的な熟議の仕組みができれば、これこそ未来に引き継ぐべき重要なレガシーであり、有形にとらわれない無形のレガシーを残すという21世紀型の万博のあり方を示す一つのモデルとなるにちがいない。

（注1）KJ法とは発案者の文化地理学者、川喜田二郎の頭文字からとった名称である。本来、フィールドデータから論理を抽出する方法として開発されたが、企業などの作業グループでよく使われる手法となった。

（注2）アスペン研究所は学者、芸術家、実業家たちがゆっくりと語り合い、思索するための「場」を提供することを目的とし、1950年に設立された。本部はアメリカのコロラド州デンバーにあり、世界各地で独特のセミナーが開催されている。日本では1975年に活動がはじまり、1998年に日本アスペン研究所が誕生した。

※画像と文章の無断転載、無断引用は固くお断りいたします。

「大阪・関西万博を考える会」メンバー（あいうえお順）

飯笹佐代子氏

青山学院大学教授（多文化社会論、文化都市政策論）

国立民族学博物館の共同研究「聖空間の経営人類学的研究」（研究代表者：中牧弘允・国立民族学博物館教授（当時）/2008～2011年）のメンバーとして、上海万博の調査を行う。

奥野卓司氏

（公財）山階鳥類研究所所長、関西学院大学名誉教授（情報人類学、人間動物関係学）

ポートピア'81やつくば'85に携わり、花博では構想委員会委員、愛・地球博では市民広場NGOイベント・プロデューサーとして参画。豊富な経験から万博、博覧会のありようの変容を実感、大阪・関西万博の構想に疑問も。

沓名貴彦氏

国立科学博物館研究主幹（保存科学、技術史）

愛・地球博が開催された愛知県豊田市出身。現在は、つくば科学万博近くの職場と上野公園の職場を行き来する日々で、万博と何かの縁を感じている。日本の博物館の父「田中芳男」の活動を鍵に、草創期の博覧会と博物館の発展に関する研究を行う。

五月女賢司氏

吹田市立博物館学芸員、国際博物館会議地方博物館国際委員会理事（博物館学、近現代史）

「EXPO'70～博物館からこんにちは！～」展（2018年）、「万博を追い求めた日本」展（2019年）を担当。現在、「万国博を考える会」による1970年万博のための基本理念草案作成の背景について研究を進めている。

佐野真由子氏

京都大学大学院教授（文化政策学、外交史・文化交流史）

万博研究とは卒業論文以来の付き合い。2010年からは広範な学術的顔ぶれによる共同研究「万国博覧会と人間の歴史」を主宰している（2015年に同名の論集を刊行）。大阪府・国際博覧会大阪誘致構想検討会委員（2015年4～7月）、経済産業省・万博計画具体化検討ワーキンググループ委員（2019年2月～）。

中山京子氏

帝京大学教授、日本国際理解教育学会副会長（国際理解教育学、社会科教育学）

人間の営みをどのように解釈し、部分をどう「切り取り」教育の場にもちこむかということに関心を持つ。科学技術の進歩、異文化の交わりの祭典のような万博を通して、子どもたちに探求への希望を伝えたいと考える。

原田憲一氏

前至誠館大学学長、比較文明学会会長（地質学、文明学）

日本館（1970年大阪万博）に設けられた巨大マルチスクリーン用の特殊カメラのレンズ設計に父が関与していた縁で招待券を入手し、市川崑監督製作の『日本と日本人』を観た。ストーリーは覚えていないが、映像美に圧倒されたことは今でも鮮明に覚えている。

座長

中牧弘允（ひろちか）氏

国立民族学博物館名誉教授、吹田市立博物館館長、千里文化財団理事長（経営人類学、文明学）

最初に見た博覧会はニューヨークの世界博（1965）。70年大阪万博は2度観覧。2010年の上海万博では日中の研究者約20名を組織し、前後3年にわたって調査研究。国際日本文化研究センターの万博共同研究（代表者：佐野真由子）のメンバー。大阪府・国際博覧会大阪誘致構想検討会委員（2015年4～7月）。

熟議を重ねる「大阪・関西万博を考える会」のメンバー

左から五月女賢司氏、沓名貴彦氏、奥野卓司氏

左から中山京子氏、佐野真由子氏、原田憲一氏

左から飯笹佐代子氏、中牧弘允氏

EXPO'70基金 2019年度助成金贈呈式

2019年5月28日／大阪ビジネスパーク・円形ホール

万博の開催理念を伝え続け 国連のSDGs（持続可能な開発目標）の達成にも貢献

1970年の日本万国博覧会の収益金を元につくられた、EXPO'70基金。関西・大阪21世紀協会は、その運用収入を用いて、「日本万国博開催の意図＊1」の趣旨に適った活動の助成に取り組んでいます。2019年度は、国内外の団体より150件（うち海外14件）の助成申し込みがあり、46件（うち海外9件）の事業を採択。辞退した3団体を除く合計43事業に対して、総額8,490万円の助成を実施することとなりました。今年5月28日、その助成金贈呈式が行われ、39団体・81名が出席しました。

当協会の堀井理事長は主催者挨拶で、「万博は6か月間におよぶ盛大な祭典だが、それで終わりではない。その開催理念をレガシーとして、開催後も世界に貢献し続けていくことに意義がある。万博記念基金助成事業は国連総会で採択されたSDGs＊2の趣旨にも合致しており、私たちは今後もこの活動を通じて世界の平和や調和ある発展のために貢献できることを願っている」と語りました。

重点助成事業に採択された「日本美術・技術博物館マンガ館」の元館長秘書・村上ポジェナ氏（左）と堀井理事長（右）

目録贈呈に続いて、助成先の審査にあたった杉原充志氏（羽衣国際大学教授）による審査総評が行われた後、今年度の重点助成事業である「日本美術・技術博物館マンガ館（ポーランド）」の紹介や、昨年度の助成団体である「東京国際ヴィオラコンクール実行委員会」と「公益財団法人鼓童文化財団」より事例発表と演奏が行われました。第2部の交流会では、今年度の助成団体がブースを設けて活動を紹介。参加者たちによる情報交換が行われ、審査委員はどんな人達に助成しているのかがわかりとても意義深いと評しました。

＊1）日本万国博開催の意図（抜粋）

日本万国博がめざしたものは、世界にはさまざまな文明が多元的に共存することを、理解と寛容の精神によって認め、それらの多様性の調和の中にこそ進歩が望まれなければならない、という「調和的発展」の精神でした。これは東洋思想の「和」の心を現代世界に呼び戻して、東西を結ぶ新しい理念として発展させようとするものでした。

＊2）SDGs（Sustainable Development Goals）

よりよい世界を実現するために、国際社会全体の普遍的な目標として掲げられた17の優先課題。貧困、飢餓、健康と福祉、質の高い教育、ジェンダー平等、安全な水とトイレ、産業と技術革新、海洋資源保護など。2015年に国連総会で採択され、2030年の達成をめざす。

贈呈式に参加した39団体と主催者、審査委員

審査総評

日本万国博覧会記念基金助成事業
第１審査会 審査委員長

杉原充志氏
（羽衣国際大学 現代社会学部教授）

助成事業への理解深まり、高度な内容も多数

今年度は、昨年度に引き続き重点助成事業（1件当り上限1,000万円）と一般助成事業（1件当り上限300万円）に分けて公募しました。重点助成事業は昨年度から設けられたもので、万博助成ならではの独自性、すなわち「日本万国博開催の意図」に適った国際相互理解の促進に資する内容を重視するものです。これを募集要項に明記したことで、申請件数は昨年度（39件）より減少した11件となりましたが、私どもは重点助成事業の趣旨に対する理解が深まった結果だと前向きに評価しています。昨年度はUAE（アラブ首長国連邦）からの申請を採択しましたが、先方が辞退されましたので、今年度の「日本美術・技術博物館マンガ館（ポーランド）」が記念すべき重点助成事業の第一号となります。

一般助成についても、昨年度同様、万博の理念である「国際交流」「国際性」を重視するもので、国際性を伴わない日本国内だけの活動は対象外としました。また、理工系の国際会議を主催される団体からの応募が毎年多くありますが、今年度からは、スポンサーのつきにくい基礎研究のみを対象としました。これらの結果、今年度の申請件数は139件で、昨年度（172件）に比べて減少しましたが、審査委員会では当助成事業の趣旨を深くご理解いただいたものと総括しています。実際、申請された内容は非常に高度なものが多く、採択件数は昨年度（47件）とほぼ同数の46件となりました。

採択率については、重点助成は9.1%、一般助成は32.4%で、助成を受けられる方々は、見事大きな難関を突破されたということです。

なお、審査にあたっては、昨年10月に申請を締め切った後、第1審査会（審査委員長・杉原充志氏）と第2審査会（審査委員長・同志社大学経済学部教授 河島伸子氏）それぞれ6人・計12人が評価・採点し、審議いたしました。

交流会にて

外務省 政府代表・関西担当特命全権大使
山本条太氏
「関西・大阪ならではのネットワーキングの決意と能力を発揮していけば、令和の御代にふさわしい美しき調和を、国境を越えて促していけるはず。その意味で、万博基金の助成事業には特別の価値があると思う」

株式会社インターアクト・ジャパン 代表取締役
帯野久美子氏（関西・大阪21世紀協会 評議員）
「日本では、文化に比べて科学技術振興への助成が多い。しかし科学技術と文化の両輪の発展がなければ、健全な未来はない。この助成事業は、そうした思いを込めて、70年万博のテーマを未来に永く伝えていくものだ」

2019年度 重点助成事業

ポーランド共和国
日本美術・技術博物館マンガ館「備前長船（おさふね）日本刀展覧会」

国交樹立100周年を記念し
日ポ両国の絆と文化への理解を深める

備前長船日本刀展覧会は、日本・ポーランド国交樹立100周年と「日本美術・技術博物館マンガ館」創立25周年を記念し、備前長船刀剣博物館（岡山県）と全日本刀匠会の協力を得て、日本刀30振りと現代の刀匠による5振りを展示するマンガ館主催のプロジェクトです。会期は2019年11月23日から2020年3月1日までの100日間。これほど多数の日本刀を日本から搬送・展示するイベントは国際的にも稀で、その展示や刀匠による作刀の実演、講演などを通して、日本刀に対する日本人の信仰心や卓越した作刀技術、優れた美術工芸品としての価値を東欧に紹介する絶好の機会となります。日本万国博覧会記念基金は、2019年度助成の「顔」となる重点助成事業として、この展覧会事業に640万円の助成を決定しました。

今年4月26日、岡山市内でその記者発表が行われ、当協会の堀井理事長とマンガ館のカタジーナ・ノヴァック館長代理、備前長船刀剣博物館のある瀬戸内市の武久顕也市長、全日本刀匠会の三上貞直会長が出席。ノヴァック館長代理は、「このプロジェクトは、関西・大阪21世紀協会の支援がなければ実現しえなかった。重点助成事業に選ばれたことで、イベント全体をレベルアップさせることもできる」と感謝の言葉を述べました。また、駐日ポーランド共和国大使館のマウゴジャータ・シュミット二等書記官も東京から駆けつけ、大使のメッセージを伝えました。記者発表は地元のテレビ局（3局）や中国新聞、山陽新聞をは

じめ全国紙も取材し、翌日のテレビニュースや新聞で大きく報道されました。

5月28日の助成金贈呈式に出席したマンガ館の元館長秘書の村上ボジェナ氏は、「国と国のつながりは、お互いの文化や考え方を理解し、違いを認め合うことで深まる。その意味で、今回の展覧会はポーランドと日本の絆を強める大きな役割を果たす。日本刀に対するポーランド国民の関心は高く、コレクターも多い。この展覧会を契機に、日本の歴史や文化へのさらなる理解を深めるとともに、自国の文化を再認識してもらえれば嬉しい。そうした活動にEXPO'70基金から支援をいただき、心より感謝している」と話しました。なお、助成金は日本刀の搬送費用などに充てる予定です。

2019年度 重点助成事業の記者発表にて（5月28日／岡山県）
左から三上会長、武久市長、ノヴァック館長代理、堀井理事長、シュミット二等書記官

日本美術・技術博物館マンガ館
クラクフ市にあり、ポーランドで唯一日本文化を紹介している国立機関。1994年設立。1920年に美術品蒐集家のフェリックス・ヤシェンスキ氏がクラクフ国立博物館に寄贈した日本の古美術品を収蔵・展示しており、彼のペンネーム「マンガ」をとって館名にしている。日本映画の上映や雅楽公演なども定期的に開催し、生け花や囲碁・将棋、盆栽などの愛好家が集まり、活動している。

昨年度（2018年度）助成事業の発表

ヴィオラスペースと「第４回東京国際ヴィオラコンクール」

発表者：山本生子さん（東京国際ヴィオラコンクール実行委員会・プロデューサー）

ヴィオラはヴァイオリンとチェロの間の音域を担当する弦楽器で、人間の声に近い音域とその美しい音色が特徴です。「ヴィオラスペース」は、そうしたヴィオラの素晴らしさを広く伝え、若手演奏家の育成などを目的とした音楽会。1992年、世界的ヴィオラ奏者の今井信子さんの提唱で始まり、2019年（5～6月・大阪、仙台、東京）で第28回を迎えます。

また、ヴィオラスペースでは国際化を図るために、アジア・環太平洋地域唯一のヴィオラ単独の国際コンクールを開催しています。ヴィオラスペースに連動して3年ごとに開催し、2018年に第4回を実施しました。

2018年は5～6月にかけて東京、大阪、愛知、宮城で開催され、世界21の国と地域から予備審査を経た32名が出場。第一次、第二次審査を経て本選へ進んだ3名が入賞し、第1位にルオシャ・ファンさん（中国）が選ばれました。このコンンクールの入賞者は、翌年以降のヴィオラスペースの音楽祭にゲストとして招かれ、再び日本で演奏を行います。

次回は、ヴィオラスペースの第30回公演となる2021年に開催の予定です。助成金贈呈式では、第4回東京国際ヴィオラコンクールの審査委員長を務めた今井信子さんと、第1位に輝いたルオシャ・ファンさんが、バルトークなど5曲を披露しました。

第1位入賞のルオシャ・ファンさん（右）と今井信子さん（左）による演奏（助成金贈呈式にて）

第４回東京国際ヴィオラコンクール（本選）でのルオシャ・ファンさん

日仏友好芸術交流事業　鼓童 × 太陽劇団『Kodo Soleil プロジェクト』

発表者：菅野敦司氏（公益財団法人鼓童文化財団・専務理事）

『Kodo Soleil プロジェクト』は、パリの夏のフェスティバルの一環として、2018年7月17～22日に実施された舞台芸術の国際交流プロジェクトです。鼓童からは若手メンバー10人が参加し、フランス太陽劇団（Soleil）敷地内の屋内公演会場で行われた全6回の上演はいずれも満席で、のべ3,200人ほどのお客様が鑑賞されました。

滞在期間中は、近くの幼稚園児にリハーサルを観ていただいたり、太陽劇団の団員向けのワークショップを行ったりするなど、太鼓を身近に感じていただく機会も設け、言葉の壁を越えて交流が深まりました。

鼓童若手メンバーによる演奏（助成金贈呈式にて）

太陽劇団は、1964年からパリ郊外に拠点を置き活動しています。劇団員が公演にまつわる料理を作ってお客様にふるまう伝統があり、今回は私たちが来ているので、ちらし寿司が出されました。まさに劇場が社交の場になっている印象です。

鼓童も太陽劇団も、活動は半世紀におよびます。今後は、そうした伝統を若手に伝えることと併せ、新しい時代の価値観や表現手法を学ぶことも大事です。太陽劇団では、今回の交流をきっかけに2020年に発表する新作を佐渡で創作したいという思いがあり、佐渡に劇団員の方がリサーチに来られます。そうした意味で、今回のプロジェクトは、鼓童と太陽劇団の交流と未来に向けた創造活動のキックオフとなるものでした。

『Kodo Soleil プロジェクト』での交流風景

本年度（2019年度）助成事業の一例

2019「平和と美術と音楽と」
Peace Art project in ひろしま実行委員会

2019年5月15日～2020年3月15日
（海外）フランス、スペイン他、（国内）広島市、広島アステールプラザ

文化・芸術による国際交流を通して、広島から、未来を担う子供たちのために平和な世界を構築して残すことの大切さを発信します。人種、宗教、世代、国境を越えて和合することの大切さを呼びかけ、平和を強く願う思いを共有することができる活動とします。

2020年東京オリンピック祝賀 能楽「火の鳥」
Theatre Nohgaku, Inc.

2020年2月29日～3月13日
アメリカ・テキサス、Luella Bennack音楽センター

当作品は伝統的な日本の「能楽」と現代オペラの要素を融合した新作劇で、2020年東京オリンピック開催を祝って上演されます。テーマは、戦時下において軍部の反対などにより開催が実現しなかった1940年の「幻の東京オリンピック」や、大成功を収めた1964年の東京オリンピックで、国や文化の違いを越えて互いの理解を深めるオリンピック精神の素晴らしさを称えます。

ネパールと日本の青少年によるグローカル交流プログラム
特定非営利活動法人 Colorbath

2019年6月1日～2020年3月31日
山口県周南市、大阪府大阪市

Web（インターネットTV電話）を活用して日本と海外の教室をつなぎ、リアルタイムで世界とつながる体験を提供する事業です。海外の生徒を日本に招待し、対面での国際交流も行います。これらの交流を通じて、普段当たり前に思っていることや世界の捉え方が変化することで、子供たちの視野や夢が広がることを目指します。

日本万国博覧会記念基金

2019年度　日本万国博覧会記念基金助成事業一覧　（★印は国外事業）

事業者名	事　業　名	助成金額（万円）
1. 国際交流、国際親善に寄与する活動		
重点助成事業（国外1事業／640万円）		
★日本美術・技術博物館マンガ館	備前長船日本刀展覧会	640
一般助成事業（国内14事業／2,640万円、国外11事業／2,135万円）		
★一般社団法人モザンビークのいのちをつなぐ会	第4回アフリカ・マコンデ族の音楽と文化交流ツアー	205
★公益社団法人北之台雅楽アンサンブル	2019オーストリア・ポーランド雅楽公演	110
特定非営利活動法人ACROSS	日本・カンボジア未来交流プログラム	90
特定非営利活動法人国際交流の会とよなか	大阪～ウズベキスタン青少年交流	100
ユネスコNGO国際民間文化芸術交流協会	大阪国際芸術祭“INTERNATIONAL FESTIVAL OSAKA”【I（愛）・F・OSAKA】	210
地球音楽プロジェクト実行委員会	ブルガリア・日本「3つの周年」記念事業 大地と天を繋ぐ、調和への祈り～ブルガリアン・ヴォイス×笙の響き～アンジェリーテ来日公演2019	240
歴史街道推進協議会	日本文化体感プログラムを通じた首都圏の留学生との交流事業	240
認定特定非営利活動法人ミュージック・シェアリング	ICEP（インターナショナル・コミュニティー・エンゲージメント・プログラム）2019	205
龍野アートプロジェクト	龍野アートプロジェクト2019 日波国際芸術祭「アニマanima」	205
大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館	国立民族学博物館2019年特別展「驚異と怪異 - 想像界の生きものたち」	240
Peace Art Project in ひろしま実行委員会	2019「平和と美術と音楽と」	170
★特定非営利活動法人劇研	日ポ国交樹立100年記念文化交流事業 文化大使 ポーランドにおける日本演劇祭	240
公益社団法人日本国際民間協力会	在日外国人・留学生を対象にした日本の農業文化と環境保全活動の実践と普及を通じた国際交流	50
神戸ワールドフェスティバル2019実行委員会	～神戸から世界へ発信♬ 留学生や在日外国人と有志日本人で作る発信型イベント～ 神戸ワールドフェスティバル2019	210
一般社団法人東京国際合唱機構	第2回東京国際合唱コンクール	240
のせでんアートライン妙見の森実行委員会	のせでんアートライン2019	240
特定非営利活動法人Art Bridge Institute	台湾と日本 時代と国を越えた民間写真史研究プロジェクト	200
★黒森歌舞伎ポーランド公演実行委員会	黒森歌舞伎ポーランド公演	240
★八雲会	ラフカディオ・ハーン来米150周年記念事業 オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン in USA	200
★ニッポン・コネクションe.V.	第19回日本映画祭「ニッポン・コネクション」	160
★北ルソン日本人会	「17世紀における日比交流史」をテーマにした古楽器演奏会及び七夕祭りの開催	210
★Theatre Nohgaku, Inc.	2020年東京オリンピック祝賀 能楽「火の鳥」	160
★日芬修好100周年記念事業御神輿行列実行委員会	OMIKOSHI FINLAND 2019	210
★コーデン城日本庭園	コーデン城日本庭園四季の文化交流公演展示	200
★ジャパン・ソサエティー	伶楽舎 - 雅楽演奏グループ	200
2. 教育、学術に関する国際的な活動		
一般助成事業（国内12事業／2,275万円、国外5事業／800万円）		
特定非営利活動法人パンゲア	ICTツールを用いた児童のための関西異文化サマースクール事業	205
WHC2019実行委員会	IEEE World Haptics Conference 2019	210
★模擬国連全米大会 日本代表団派遣事業運営局	2020年模擬国連会議全米大会第36代日本代表団派遣事業	100
★公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	高校模擬国連国際大会への第13回日本代表団派遣支援事業	160
★日蘭学生会議	第十回日蘭学生会議	190
強相関電子系国際会議組織委員会	強相関電子系国際会議2019	240
小松サマースクール実行委員会	小松サマースクール2019	190
第15回応用生物無機化学国際シンポジウム組織委員会	第15回応用生物無機化学国際シンポジウム	300
特定非営利活動法人Colorbath	ネパールと日本の青少年によるグローカル交流プログラム	110
科学の祭典実行委員会野外実験班	万博公園理科実験野外教室～科学実験を通じた国際交流によって次世代の科学者を育成する～	50
第10回食用菌根性きのこに関する国際ワークショップ実行委員会	第10回食用菌根性きのこに関する国際ワークショップ	60
★一般財団法人教育支援グローバル基金	ビヨンドトゥモロー アジア・サマープログラム 社会経済的に困難な状況にある日本とタイの若者の人材育成事業	200
大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構	J-PARC国際シンポジウム2019：「宇宙・物質・生命の起源を求めて」	300
エコデザイン学会連合	第11回環境調和型設計とインバースマニュファクチャリングに関する国際シンポジウム	240
特定非営利活動法人エデュケーション ガーディアンシップグループ	第24回海外高校生による日本語スピーチコンテスト及び青少年のための異文化交流プログラム	200
フェリックス・ウフエ・ボワニ大学CIRES経済政策分析センター	国際セミナー「アフリカ諸国の発展途上における社会経済的変革：日本から学べることは何か」	170
★社団法人欧州日本専門家協会	人間中心のデジタル化：安全で調和した豊かな欧州および日本の未来に向け、次世代の人材とロボットをいかに開発するか？	150

※辞退を除く

令和OSAKA天の川伝説2019

7月7日／大川・天満橋（八軒家浜）～北浜（天神橋）周辺
主催：おしてるなにわ　共催：関西・大阪21世紀協会

大川に浮かぶ「いのり星®」（八軒家浜より天神橋を望む）

八十島祭（やそしままつり）「招霊」のパフォーマンスを実施

七夕の夜、人々の願いを託した「いのり星®」（LEDを光源とする光の球）を天満橋一帯の大川に放流し、天空の天の川を地上に再現する「令和OSAKA天の川伝説2019」。大阪の観光集客につなげるとともに、人々の心に愛と希望の光を灯したいという願いを込めて2009年（平成21年）に社会実験として行われ、以来、関係者の熱意によって継続され、夏の風物詩として定着してきた。昨年は西日本豪雨の影響で中止され2年ぶりの開催。第10回となる今回は、過去最多の7万個の「いのり星®」が放流され、約6万5,000人が幻想的な光景を楽しんだ。

天満の地名は「天に満ちる星」に由来し、かつて難波宮があった時代、天満は日本の平安を願って星に祈りを捧げる地だといわれていた。また、平安京に遷都された後、上町台地先端の難波津（なにわづ）では、新天皇即位の翌年に「八十島祭」が斎行された。

八十島祭は、天皇に遣わされた女官が大海原の風を天皇の御衣（おんぞ）に受け、それを天皇に返上することで天皇の体内に「大八洲之霊（おおやしまのみたま）」を付着させ、国家・皇室の繁栄と安寧を祈る祭祀。平安時代前期の850年から鎌倉時代前期の1224年まで、22回行われたことが記録に残っている。主催者のおしてるなにわ・高島幸次理事（大阪大学招聘教授）は、「難波宮の時代には、天皇自らが御衣に風を受けたと考えられる。こうした重要な場所で、第10回目の天の川伝説が開催されることはとても意義深く、このイベントを通じて大阪には誇るべき神事があることを多くの人に知ってもらいたい」と話す。

今年、元号が「令和」に改まり、新天皇ご即位の翌年の令和2年に「八十島奉祝祭」を行う機運が高まっている。令和OSAKA天の川伝説2019では、そのプレイベントとして、八軒家浜船着場の特設ステージで大阪天満宮の巫女による「招霊」のパフォーマンスが行われ、見物に訪れた人たちは、約800年前に途絶えた厳かな即位儀礼の一端を目の当たりにした。

今回は、オペラ歌手の増田いずみさんやヴァイオリニストのSHOGOさんたちによる「七夕コンサート」も行われ、美しい音色で来場者を魅了。ひこぼしくん（枚方市）とおりひめちゃん（交野市）のキャラクターも来場し、両市に伝わる「七夕伝説」や市の魅力をアピールするなど、賑やかな一夜となった。

生國魂神社の中村権禰宜の演奏による和琴（わごん）の菅掻（すががき）の音色が響く中、厳かに行われた「招霊」のパフォーマンス（八軒家浜船着場・ひまわり船上）

ひこぼしくん（右）とおりひめちゃん（左）

七夕コンサート（八軒家浜船着場・ひまわり船上）

増田いずみさん（中央）、安藤史子さん（フルート／右）、山口彩菜さん（ピアノ／左）

SHOGOさん（左）、モーリーさん（ギター／右）

大阪天満宮の湧き水「天満天神の水」を使用して関西大学が開発した梅サイダー「UME・TEMMA」。（天の川グルメストリート）

大阪発「天の川カクテル」（考案者「BAR CADBOLL」林壮一氏）が、「OSAKA Star River」に名称を一新。「マンハッタン」や「シンガポールスリング」のような地名を冠した世界的カクテルを目指す。（観光船ひまわりにて）

短冊に願いを書く入場者（八軒家浜会場）

おかげさまで5周年
多くのアーティストがみのりある活動を

関西で活動する芸術・文化団体や個人を、市民や企業の寄付で支援するアーツサポート関西（ASK／事務局　関西・大阪21世紀協会）は、今春5周年を迎えました。おかげさまでこれまでの寄付の累計は1億2,000万円に達し、100件を超える助成を行ってきました。現在、さまざまな分野のアーティストが、皆さまのご支援でみのりある活動を行っています。今後も一人でも多くのアーティストを支援するため、そしてこの取り組みを未来につなげていくため、引き続き皆さまのご支援・ご協力をお願いします。

2019年度は総額1,050万円を23事業に助成

公募助成の審査の結果、総額1,050万円を、美術・デザイン、音楽、舞台芸術、伝統芸能の4分野23事業に助成することが決まりました。申込総数は71件で、採択率は約3.1倍。選ばれた活動はいずれも高い芸術性を備え、将来性が期待されます。

採択事業の紹介

音楽（個人：岩井コスモ証券ASK支援寄金助成）

事業者：谷本沙綾（たにもと さあや／ヴァイオリニスト）

活動概要▶国際アカデミーやコンクールなどへの参加（2019年4月～2020年3月）

相愛大学器楽科特別演奏コースに在籍する谷本さんは、小学5年生の時より昨年度まで、兵庫県立芸術文化センターの佐渡裕さん率いるスーパーキッズオーケストラに8年間所属し、東北や熊本などで震災復興支援の演奏会など、国内外のツアーに参加してきました。昨年、国内最高峰の全日本学生音楽コンクール高校の部で見事第1位に輝いたほか、第19回大阪国際コンクール弦楽器部門Age-Hファイナル第2位（最高位）をはじめ、数々のコンクールで上位入賞を果たしてきました。2019～20年は、ヴァイオリン演奏技術のさらなる向上を目指し、オーストリア（ザルツブルグ）やポーランド（ナウェンチェフ）の夏期国際アカデミー、中国・珠海市「若い音楽家のためのモーツァルト国際コンクール」など、海外のセミナーやコンクールへの継続的な参加を予定しています。ASKはその経費などを助成することで、関西を中心に世界で活躍する谷本さんの活動を支援します。

谷本沙綾さん

舞台芸術（個人）

事業者：柳沼昭徳（やぎぬま あきのり／劇作、演出家）

活動概要▶烏丸ストロークロック『まほろばの景』再創作など（2019年12月～2020年3月）

柳沼さんは、近畿大学文芸学部芸術学科在籍中の1999年に、劇団「烏丸ストロークロック」を旗揚げ、以来、京都市を拠点に活動。新作を「消費」する小劇場界の流れに異を唱え、一つの題材に対して数年にわたり様々な角度からアプローチした短編を上演し、それを積み重ねて長編に昇華させるスタイルによって、今、大きく注目されています。2017年には仙台市市民文化事業団主催による、東日本大震災をテーマにした短編『まほろばの景』を上演。以後、現地で神楽の復興に携わる人たちや山岳信仰などを丹念に取材した短編を連作し、2018年に京都でその長編版を上演して反響を呼びました。今回は兵庫、三重、東京、広島で、その再創作編を上演します。東日本大震災によって見ず知らずの者同士が利他的に助け合う姿を目にした主人公が、さまざまな人との関係を通して人生を変化させていくドラマで、ASKはその上演にかかる経費などを助成します。

柳沼昭徳さん　©松原豊

『祝・祝日』（2018）　©相沢由介

伝統芸能（個人）

事業者：菊央雄司（きくおう ゆうじ／邦楽演奏家）

活動概要▶平家復曲プロジェクト（2019年1月～2020年12月）

菊央さんは1989年に五代目菊原光治さん（三味線、箏）に入門し、その後、菊津木昭さん（胡弓）や今井勉さん（平家琵琶）にも師事。大阪文化祭賞奨励賞（2012年）、第21回日本伝統文化振興財団賞（2017年）など、多くの受賞歴があります。現在、平家物語の語りである平曲の伝承者は、当道（中世から近世にかけて存在した目の不自由な琵琶法師の全国的組織）の流れを組む今井勉さんだけで、伝承曲は全200曲中わずか8曲ほどしかありません。そこで菊央さんは、2019年1月に「平家復曲プロジェクト」を立ち上げ、平家物語のなかでは珍しい大阪ゆかりの『逆櫓』の復曲に取り組んでいます。『逆櫓』は大阪の渡辺橋あたりで義経と梶原景時が口論をする場面。復曲に1年をかけ、2020年12月に大阪で平家琵琶の演奏会を開催する予定です。ASKは、日本音楽の源流の一つである平家琵琶を大阪の地で保存復曲し世界へ発信する活動の経費などを助成します。

菊央雄司さん

2019年度 アーツサポート関西 助成先

岩井コスモ証券ASK支援寄金助成：総額400万円

分　野	申請者	活動内容	交付額（万円）
美術 デザイン	石黒　健一	物の価値の不確定さを主題に、異なる文化や歴史の文脈における様々な関係性をインスタレーションとして手掛ける。	30
美術 デザイン	梅田　哲也	廃材の動くオブジェや実験的サウンドアートを手掛け、海外でも活躍する注目のアーティスト。昨年度より継続助成。	40
美術 デザイン	加藤　至	アーティストユニット「ヒスロム」の一人。子供の遊びのような感覚で社会の深層にある規範や暗黙の了解をあぶりだす。昨年度より継続助成。	30
美術 デザイン	川上　幸子	シンプルな幾何学パターンを反復的に描く際に起こるズレによって、視覚的な触覚を喚起する平面作品を制作。	40
美術 デザイン	金　サジ	在日韓国人として生まれ、社会的マイノリティの日常を創作的神話の世界として表現した写真シリーズを制作。昨年度より継続助成。	40
音楽	谷本　沙綾	昨年第72回全日本学生音楽コンクールで第1位を獲得。今後の国際的な活動が注目を集める若手ヴァイオリニスト。海外でのコンクールやマスタークラスへの参加を予定。	100
美術 デザイン	前田　耕平	自身の実体験において人や物との間に起こる予測不可能な状況を映像や立体、写真などで表現。国際的な展開を視野に海外での活動を予定。	40
音楽	山口　莉奈	注目の若手クラシックギタリスト。国際的な活動を視野に、数多くのコンクールへの出場や演奏会の開催を予定。昨年度より継続助成。	40
美術 デザイン	山西　杏奈	空気を含んだ布や樹脂のような素材感を持つ作品を木彫で制作。木の種類の違いにも意識を向ける新世代の木彫作家。	40

一般助成（交付額順）：総額500万円

分　野	申請者 / 活動名	活動内容	交付額（万円）
美術 デザイン	吉田　憲史 「ポストLCC時代のサイトスペシフィックアート」展の開催など	京都芸術センターで「ポストLCC時代のアート展」を開催する。アジアの地理的な枠組みの変容や観光産業信仰などをアートの手法を用いて批評的に浮かび上がらせる。	50
美術 デザイン	麥生田　兵吾 作品集「Artificial S」出版など	「Artificial S」と自身が呼ぶ写真理論の実践として、数年にわたり展覧会を開催してきた。今年その集大成として同名の作品集の出版を予定している。	50
音楽	大森　香奈 『大森香奈マリンバコンサート』、関西フィルとの共演など	関西を拠点に国際的に活動するマリンバ奏者。大阪フィルや関西フィルなどの主要オーケストラとの共演多数。	50
音楽	梅本　貴子 CD制作および記念コンサートの開催など	関西フィルハーモニー管弦楽団首席クラリネット奏者。ソロとしても積極的に活動。CD制作および記念コンサートの開催を予定している。	50
音楽	清原　邦仁 関西歌劇団でのオペラ活動（出演、演出）など	関西歌劇団を中心に、関西を拠点に活動するオペラ歌手。演出も手掛けるほか、関西におけるオペラの普及活動にも積極的に取り組む。	40
舞台芸術	湯山　大一郎 日本・カナダ合同舞踏公演「TAKER」の開催など	長年「大駱駝艦」の主要メンバーとして活躍。昨年から京都を中心に活動。自主企画による「TAKER」のカナダ公演などを予定している。	50
舞台芸術	岡部　尚子 空晴プロデュース「ボクのサンキュウ（仮）」の演出など	大阪を拠点にホームコメディを得意とする劇団「空晴」を主宰。関西の演劇界を代表する女性演出家・劇作家としてさらなる飛躍が期待される。	50
舞台芸術	武田　力 此花アート部！（仮称）の創設など	民俗史を調査研究しパフォーミング的な表現を創出する活動を続ける。その独創性と多様性は大きな注目を集めている。	40
舞台芸術	柳沼　昭徳 烏丸ストロークロックの公演活動など	脚本家・演出家として劇団「烏丸ストロークロック」を主宰。時間をかけて形作られる舞台は、立体的・多層的な芸術表現として高い評価を得ている。	80
伝統芸能	菊央　雄司 「平家復曲プロジェクト」など	三味線、琵琶、箏、胡弓の4種の楽器を弾きこなす邦楽演奏家で、この世代のトップランナー。「平家復曲プロジェクト」に取り組み、失われた平家琵琶曲の復曲を行っている。	40

個別寄金助成（交付額順）：総額150万円

寄金名	申請者	活動名	交付額（万円）
八千代電設工業伝統芸能支援寄金	公益財団法人山本能楽堂	「能と遊ぼう！」「アートによるこどものための能案内」など	50
八千代電設工業伝統芸能支援寄金	公益財団法人大槻能楽堂	青少年に向けてのリニューアル企画（仮）	50
北倶楽部記念寄金	公益財団法人関西フィルハーモニー管弦楽団	第302回定期演奏会（ザ・シンフォニーホール）	45
ソフィア寄金	山本理恵子	平面絵画作品の制作活動	5

寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金

第5回上方落語若手噺家グランプリ決勝戦 桂雀太さんが悲願の優勝

上方落語の継承と若手噺家の育成を目的として、アートコーポレーション株式会社の寺田千代乃社長の寄付で創設された「寺田千代乃 上方落語若手噺家支援寄金（500万円）」。今年6月24日、これをもとに「第5回上方落語若手噺家グランプリ」（主催：公益財団法人 上方落語協会）の決勝戦が大丸心斎橋劇場で開催され、桂雀太さん（1977年・奈良県出身）が優勝。決勝戦の審査は、在阪のテレビ・ラジオ局のプロデューサーやディレクター7名によって行われました。

今回は、平成13～17年に入門した若手噺家のうち、予選を勝ち抜いた9名で決勝戦が行われました。雀太さんの演目は古典落語の定番『粗忽長屋』、こみいったストーリーを軽妙に演じ切り、会場を笑いの渦に包みました。

桂雀太さん（賞贈呈式にて）

寺田社長から賞金20万円と記念盾を贈られた雀太さんは、「5回目の決勝出場で悲願の優勝を果たすことができてとても嬉しい。このコンテストで大いに勉強し、成長させてもらった」と喜びを語りました。また、審査員は「ここ数年で若手噺家の実力がぐっと伸びた。将来が楽しみ」と話されました。決勝戦に進出した噺家は以下の通り。桂雀太（優勝）、笑福亭喬介（準優勝）、桂華紋、桂小鯛、桂佐ん吉、桂三四郎、桂二葉、笑福亭べ瓶、露の紫。（敬称略）

伊藤忠商事株式会社

専務理事 社長特命（関西担当）
深野弘行氏

オープンイノベーションで未来へチャレンジ

近江商人発祥の「三方（さんぽう）よし」*の精神で、商社ならではの社会貢献活動に取り組む伊藤忠商事。その関西担当役員の深野氏に、関西への思いや創業者から受け継ぐ企業理念、関西経済同友会代表幹事として、来る2025年大阪・関西万博への思いなどを伺った。

*「商売だから売り手と買い手が満足するのは当然。世間（社会）に貢献できてこそよい商売といえる」という経営哲学。

思い出の地・関西

生まれは東京、父が転勤族だったので、海外をはじめ全国各地に移り住みました。小学４年のときに初めて関西は西宮市に居住しました。関西弁には自分でも驚くほど早く馴染み、５年生になると友だちや弟と流暢な関西弁で会話ができるようになりました。中学生になって東京へ転居しましたが、１年間は関西弁が抜けなかったほどです。蕎麦やうどんのつゆでいえば、今だに関西風の出汁が大好きです。また、西宮にいた頃は、屋台のたこ焼きをよく買って帰ったことを覚えています。

休日には家族で六甲や箕面の山にハイキングに行ったり、白浜や天橋立で海水浴をしたり、遊園地にも連れて行ってもらったりしました。小学生の頃から鉄道が好きで、とくに宝塚ファミリーランドの「電車館」は大好きな場所でした。阪急電車の実物や模型などが展示してあり、行けば必ずここに入り浸り。あの阪急マルーン（車両の茶色い塗装）は、10層近くも塗り重ねたこだわりの色合いです。今では閉園しましたが、そこの展示物は正雀工場（大阪府摂津市）に移されています。現在は毎年春と秋に「阪急レールウェイフェスティバル」が催され、できるだけ私も見に行くようにしています。鉄道好きの原点は関西にあったのです。

通商産業省（現経済産業省）に入省して転勤で各地をまわりましたが、2009年に近畿経済産業局長として再び子供時代の思い出の地・関西に戻りました。さらに、ご縁があって伊藤忠商事の関西担当専務理事に着任したのです。

創業者の思いを受け継ぐ

私がとても大事にしているのが、創業者・伊藤忠兵衛の経営哲学「三方よし」はもとより、先例にこだわらず外国と貿易を始めたり、少人数でも新しい分野に果敢にチャレンジしたりする行動力。伊藤忠兵衛記念館*に行くと、その創業精神をひしひしと感じます。

当社は、社会貢献活動の発信拠点として、2012年に東京は青山に「伊藤忠青山アートスクエア」をオープンしました。アートを通じて潤いのある社会づくりを発信するもので、特に社会貢献に熱心であった二代目伊藤忠兵衛の思いを受け継ぎ、障がい者の自立支援など、様々なテーマの展覧会を開催してきました。今年２月から４月にかけては、障がいを持ちながらも、全国各地で精力的に活動されている書家の金澤翔子さんの書展を開催し、好評を博しました。

*初代伊藤忠兵衛の旧邸（滋賀県犬上郡豊郷町）。繊維卸商から総合商社への道を拓いた足跡が、初代の愛用品や多くの資料とともに紹介されている。

豊かさを担う責任

子供たちに交渉力のある国際人になってもらいたいとの思いを込めて、大阪本社では2011年から、JR西日本が主催する「キッズウィーク」という小学生対象の職業体験イベントに参画しています。「一日社員」の辞令を渡し、名刺交換などの「ビジネスマナー研修」の後、実際に国際電話で当社の駐在員と連絡をとり、海外からバナナを仕入れるという体験をしてもらいます。子供たちには国際電話をかけること自体が新鮮で、貴重なチャレンジとなっているようです。

働き方改革の一環として、当社では20時以降の残業を原則禁止し、仕事が残っている場合は翌日朝にシフトする「朝型勤務」（朝の残業にも深夜勤務と同等の手当を支給）を奨励しています。また、2017年から毎月１回程度、「伊藤忠朝活セミナー」という希望者に向けた研修・講演を行っています。各界から有識者の方を講師に招き、朝の７時30分から始業時

間の９時前までお話を伺うもので、今年２月には、タレントの向井亜紀さんに講演をしていただきました。向井さんは、がんに苦しみましたが現在も精力的に活動されています。そうした壮絶な体験を伺い、病気をこえて前向きに仕事に取り組んでいく姿勢に感銘を受けました。

また、当社では2017年から「脱スーツ・デイ」を開始しています。当初は金曜日だけでしたが、2017年６月からは水曜日を加え、ジーンズも可としています。昨年からは、5～9月の夏場は毎日「脱スーツ・デイ」としています。毎朝、今日は何を着ていこうかと考えることは、ある意味でクリエイティブな感覚を刺激されるし、ましてや当社は繊維が事業の重要な柱になっていますから、自らのファッションに関心を持つのは大事なことです。

国内外のさまざまな地域に出向いて仕事をさせていただく当社にとって、地域貢献活動も重要なテーマです。和歌山県の仁坂吉伸知事のご意向に応えて、「企業のふるさと」という活動を続けて今年で10年になります。高野山の麓にある「天野の里」（和歌山県かつらぎ町）で、当社の社員が田植えを行い、秋になるとその収穫を行うことで現地の方々と交流しています。

伊藤忠商事社員による天野の里での田植え風景

当社はグループ全体で、国内外に約２万の事業拠点があり、日々 2,000万人のお客様と接しています。皆さまに商品やサービスをお届けし、広く社会に豊かさを提供し続けることは、企業が存続していく上で不可欠なことです。その意味で当社は、「未来に向かって豊かさを担う責任」を企業理念としています。

代表幹事に就任して

ラグビーワールドカップ（2019年９～10月）やワールドマスターズゲームズ（2021年）、そして大阪・関西万博（2025年）と、今まさに、世界に向かって大阪・関西の魅力を発信するビッグチャンスが到来しています。今年５月に関西経済同友会の代表幹事を仰せつかりましたが、このような時期にあって身の引き締まる思いです。

こうしたチャンスを生かし、大阪・関西をさらに発展させるためには、イノベーションを生みやすい環境づくり、すなわち人を惹きつける魅力を高めることが重要だと考えます。現在、関西経済同友会は、「チャレンジ」「デザイン」「ベース」の３つを重点課題としています。「チャレンジ」は、万博、MICE・IR、ゴールデン・スポーツイヤーズなどを契機として、関西経済を発展させるためのベンチャーシステムの支援や、食・芸術・文化などの発信力強化です。「デザイン」は、そうしたイベントなどを契機に、将来の「ありたい都市像」「誰もが夢・希望を持つことができる未来像」についての研究や提言を行うこと。「ベース」は、財政健全化や安全保障、地域主権など、チャレンジとデザインを持続可能にする安心・安全・自由な土壌づくりに向けた提言や活動です。

2025年大阪・関西万博のレガシー

2025大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマですが、その対象となる課題は非常にマルチです。高齢化社会の進展に伴って、いかに健康を維持して人生を生き生きと過ごすかは人類共通のテーマ。その意味で「いのち輝く」といえば、長寿高齢化社会への対応だけでなく、貧困、食糧、環境、水産資源、安全な飲み水、子供達への質の高い教育など、さまざまな問題が対象となります。これらは国連で採択されたSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）とかなりの部分で呼応します。

こうした課題を解決するためには、さまざまな技術やビジネスモデルの開発、暮らし方の工夫などが必要になるでしょう。そうしたことについて、2025年大阪・関西万博では企業や大学、行政、研究機関、クリエーター、学生などがオープンイノベーションで、国境を越えて一つのテーマのもとに集まって解決策を考え、そこで生まれたアイデアを形にすることができれば、とてもいい万博になると思います。また、ベンチャー企業のアイデアを出すのもいいでしょう。そうなれば日本だけでなく世界各国のベンチャー企業も参加してくれるかもしれません。そうした新しい試みを見せるのが万博本来の意義であり、今回はそれが期待されていると思います。

2025大阪・関西万博の成果は、そうしたフォーマットをつくることにあると思います。万博を契機に、さまざまな課題をオープンイノベーションで解決する習慣や文化が育まれれば、2025年大阪・関西万博の素晴らしいレガシーとなるでしょう。記念碑的な施設を建てて残すという考えもありますが、今回の万博は、ハードよりソフトを残すことが大事ではないかと思います。

伊藤忠兵衛記念館にて
（前列左から2人目が深野氏）

「金澤翔子書展 -祈-」ポスター
（2019年2月25日～4月2日開催）

夏休み大阪ステーションシティ・キッズウィーク「商社のおしごとを体験しよう」にて
（2017年8月29日:伊藤忠商事大阪本社）

宝塚ファミリーランドで展示されていた、大正13年製の阪急300形電車カットボディ（阪急レールウェイフェスティバルにて／撮影:深野弘行氏）

深野弘行氏
1957年東京都出身。慶應義塾大学経済学部卒業後、1979年通商産業省入省。近畿経済産業局長、原子力安全・保安院長、特許庁長官などを経て、2013年伊藤忠商事顧問。2018年より現職。2019年５月に関西経済同友会代表幹事に就任。

伊藤忠商事株式会社
東京本社：東京都港区北青山２丁目５番１号
大阪本社：大阪市北区梅田３丁目１番３号
1858年創業、1949年設立。資本金2,534億4,800万円。従業員4,352名。繊維、機械、金属、エネルギー、化学品、食料、住生活、情報、金融の各分野で国内、輸出入および三国間取引や事業投資などを展開。

関西北前船研究交流セミナー 大阪

2019年5月31日／住吉大社

主催：関西北前船研究交流セミナー実行委員会
後援：国土交通省、日本観光振興協会

北前船が紡いだ歴史・文化を寄港地連携で地域活性化に活かそう

2017年4月に日本遺産*の認定を受けた「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」。その寄港地45市町のうち、関西地区では9市町**が認定されている。そこで関西地区の寄港地による共同事業「関西北前船寄港地研究交流セミナー」が企画され、今年度は北前船の起点・終点地である大阪市で開催された。会場は、船主や廻船業者が航海の安全を願って参詣し、数多くの石燈籠を奉納した住吉大社。日本近世海運史が専門の上村雅洋氏（和歌山大学名誉教授）による基調講演や、北前船が運んだ昆布や寄港地ならではの食材で集客を図る人たちによるパネルディスカッションなどが行われた。

冒頭、主催者を代表して挨拶した大阪市副市長（当時）の田中清剛氏は、「ストーリーの広域性と関西の結束力を活かして、観光振興や交流人口の拡大につなげていくことが大切」と呼びかけた。また、来賓の国土交通省海事局長・水嶋智氏は、「この企画を担った関西・大阪21世紀協会は、北前船にヒントを得た地域活性化の方策を探る取り組みをずっと続けてこられた。自治体の方々が、北前船という共通項で地域活性化に取り組まれていることを大変心強く思う」と語り、セミナーの開催を祝った。

会場風景（住吉大社 吉祥殿）

この日は、寄港地市町の学芸員や観光振興に携わる人たちが多数参加。北前船が紡いだ歴史・文化の観光活用について知見を深めるとともに、広域で連携して今後の地域発展に活かすため、情報交換や交流の輪を広げる機会となった。

＊日本遺産…文化庁が2015年度から、地域に点在する有形・無形の文化財を対象に「地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリー」として認定し、活用する制度。
＊＊9市町…京都府宮津市、大阪府大阪市、兵庫県神戸市、姫路市、洲本市、赤穂市、高砂市、たつの市、新温泉町

基調講演（要旨）

北前船の航海と安全

和歌山大学名誉教授
上村雅洋氏（うえむら まさひろ）

北前船とは、日本海・蝦夷地と瀬戸内海・大阪を結ぶ廻船で、江戸時代後期から明治時代中期にかけて活躍した。船の構造は弁才船（べんざいせん：千石船とも呼ばれる大型帆船）や合の子船（あいのこぶね：和洋折衷型の帆船）といった長距離航行の大型和船で、高さは4～5階建ての建物ぐらいある。積載量が大きいことに加え、帆走性能が良いので櫓を漕ぐための多数の乗組員を必要とせず、経済性に優れていた。

北前船は、近江商人が雇っていた船主や船頭（加賀や越前の人たち）が、自ら船を持って独立したことにはじまる。荷物を運んで運賃を得るのではなく、商品を自分たちの裁量で買い取って輸送先で販売するもので、地域間の価格差を利用して利益を得る投機的な商いを行った。大阪や瀬戸内で木綿、塩、油、砂糖、鉄、米、酒など、敦賀で梱包用の縄や筵（むしろ）、新潟で米を買い付け、それらを「下り荷」として蝦夷地を目指した。逆に大阪向けの「上り荷」は、蝦夷地で仕入れた鯡（にしん）や〆粕（魚肥の一種）、数の子、昆布など。鯡や〆粕などは、当時、河内木綿や阿波藍などの作物肥料として欠かせなかった。

活動時期は、鯡の漁期（4～5月）に合わせるのと、冬季の日本海の荒波を避けるため春から秋に限定。本来、弁才船は平穏な海上を航行することを前提に造られており、荒天を避けるため多くの寄港地で風待ちの停泊をした。こうして北前船を介して文化の交流も行われたのである。しかし、安全運行より利益追求を優先するあまり、重心の不安定さや水密性に乏しいといった船体の脆弱性を無視して、荒天や夜間をついた無理な航行が悲惨な海難事故を生んだ。とくに、上り荷を利益の源泉とした北前船の宿命というべきか、大阪への上りに事故が多発した。

危険と隣り合わせの仕事であったため、船主や船頭たちは各地の社寺に船絵馬を奉納して航海の安全を祈願し、また、無事に帰還した際には感謝の意を表した。船絵馬の多くは大阪の絵馬屋で作られ、その背景には、海上安

全の守護神である住吉大社が多く描かれている。

北前船は、鯡の代わりとなる化学肥料の登場や、汽船や鉄道の発達による輸送構造の変化、通信技術の発達により地域間の価格差がなくなったことなど、時代の波にのまれて明治20年代以降は衰退を余儀なくされた。

パネルディスカッション

日本遺産の活用　～ガストロノミーツーリズムの観点から～

コーディネーター　尾家建生氏（おいえ たてお）（大阪府立大学客員研究員）

パネリスト　後迫美乃里氏（うしろさこ みのり）（(株)小倉屋山本 営業企画室長／大阪市）
茶谷昌史氏（ちゃだに まさふみ）（旅館「茶六別館」主人／宮津市）
栫山一希氏（かこいやま かずき）（日本料理「かこみ」店主／大阪市）

尾家建生氏

ヨーロッパの諸都市では、2010年頃から食文化の魅力を活用した観光開発「ガストロノミーツーリズム」に力を入れている。ガストロノミーとは、ヨーロッパでは一般的に「おいしい食べ物を選択し、準備し、給仕し、楽しむ技術」と説明され、日本では「美食術」や「美味学」と訳されている。尾家氏は、日本でもこれを活用した観光振興が重要であるとし、「その仕組みをつくるのが、生産者、加工業者、料理人であり飲食店。さらに宿泊施設や市場、店舗といったカテゴリーが一つになって食によるブランドづくりが可能になる」と指摘。和食が世界的に注目される今、日本遺産に認定された北前船の遺産を活用し、いかに観光集客につなげていくかについて登壇者の意見を求めた。

後迫美乃里氏

後迫氏は、「北前船が運ぶ北海道の真昆布を使って、昆布の小倉屋山本を創業して170年。看板商品の『えびすめ』を販売して70年になるが、それでも海外からのお客様に昆布の佃煮や塩昆布の美味しさをご理解いただくのは難しい。そのため、まずは昆布出汁の美味しさから認知してもらうようにしている。日本の若者たちにも昆布のうま味を知ってもらうことも重要」と、地道な取り組みの必要性を強調した。

茶谷昌史氏

茶谷氏は、「40年前、天橋立観光旅館協同組合の青年部が、松葉ガニに並ぶ冬の看板料理として〝ぶりしゃぶ（薄切りにした寒ブリの身を昆布出汁にさっと通して食べる鍋料理）〟を発案した。また、25年ほど前から丹後とり貝や岩牡蠣を獲り始め、今では当地の名物となっている。その他、ぐじ（赤甘鯛）、はたはた、鰈、かます、秋イカ、鰆など、お客様はその土地で獲れた新鮮な食材を楽しみに来ていただいている。その気持ちに応えるべく、日々おもてなしをしている」とし、宮津市もサン・セバスチャン（スペイン北部のバスク地方）のような美食都市を目指して頑張りたいと語った。

栫山氏は、「一昨年、大阪道修町で長崎奉行を接待したときの本膳料理を完全再現し、電気もガスも調理器具もない江戸時代に、こんなに凄い料理を作った革新的な料理人がいたことに驚いた。また、最近は外国人シェフが日本料理を勉強しに来ることが増えた。私も年に数回、フレンチやイタリアン、中国料理のシェフとコラボレーションするが、北前船寄港地の料理人とコラボしてみるのはどうか。食材の交流だけでなく、料理人として感性をぶつけ合うのも面白い」と、食による観光振興を伝統だけで進めるのではなく、革新的な取り組みの重要性を指摘した。

栫山一希氏

日本遺産に追加認定された7市町に文部科学大臣より認定証を授与（参加者交流会にて）
山形県鶴岡市、新潟県出雲崎町、石川県金沢市、広島県竹原市、兵庫県姫路市、同たつの市、香川県多度津町

セミナー開催を記念して奉納された絵馬（絵は東學氏、字は住吉大社宮司・髙井道弘氏）

北前船船主などから寄進された「石燈籠」を見学（住吉大社境内）

住吉大社に伝承される、航海安全の祈りを込めた神楽・熊野舞「すみのえ」を見学

平成30（2018）年度

大阪文化祭賞 受賞者決定

坂東竹三郎さんら９公演に賞を贈呈

大阪府内で1年間に開催された全公演の中から、とくに優れた成果をあげた人や団体を顕彰する大阪文化祭賞（主催：大阪府、大阪市、関西・大阪21世紀協会）。昭和38（1963）年の創設以来55回目を迎えた今年度は、賞候補に推薦された60公演の中から、企画・内容・技術などが総合的に優れた9公演が選ばれました。審査員は、実際に公演を観た関西の著名な芸術家や文化人、ジャーナリストがつとめています。

今年度は、上方歌舞伎のベテラン・坂東竹三郎さん（歌舞伎役者）、六代目笑福亭松鶴生誕百年祭実行委員会、尾高忠明指揮 大阪フィルハーモニー交響楽団が大阪文化祭賞に、その他6公演が奨励賞に選ばれました。

今年3月15日にリーガロイヤルNCB（大阪市北区）で贈呈式が開催され、坂東さんは「私の大好きな演目で賞をいただき、夢のような気持ち」と笑顔で語りました。また、六代目松鶴の弟子の鶴笑さんは、「皆に祝ってもらうてありがたいこと。あっち（天国）へ帰ったら、米朝や春団治らに自慢してやります」と、亡き師匠の言葉を〝代読〟し、笑いを誘いました。

関西・大阪21世紀協会は、大阪文化祭賞を芸術・文化分野における人材の発掘や育成、交流事業の一環として重視し、受賞者の記念公演を主催するなどアピールに努めています。また、受賞者の一層の励みとなるよう、副賞賞金（大阪文化祭賞20万円、奨励賞5万円）を提供しています。

受賞者（前列）と主催者および各部門の審査委員長（後列）

坂東竹三郎さん

笑福亭鶴笑さん（六代目笑福亭松鶴生誕百年祭実行委員会委員長）

福山 修さん（大阪フィルハーモニー交響楽団事務局次長：尾高忠明さん代理）

各部門の受賞者　（　）内は受賞成果

第1部門　－伝統芸能・邦舞・邦楽－

坂東竹三郎（七月大歌舞伎『女殺油地獄』）／**大阪文化祭賞**
浦田保親（第656回 大槻能楽堂自主公演能『俊寛』）／**奨励賞**
水野箏曲学院
（MIZUNO KOTO ACADEMY ORIGINAL CONCERT vol.14）／**奨励賞**

第2部門　－現代演劇・大衆芸能－

六代目笑福亭松鶴生誕百年祭実行委員会
（六代目笑福亭松鶴生誕百年祭）／**大阪文化祭賞**
人形劇団クラルテ
（第117回公演 創立70周年記念公演『はてしない物語』）／**奨励賞**
空晴＜からっぱれ＞（第17回公演『となりのところ』）／**奨励賞**

第3部門　－洋舞・洋楽－

尾高忠明指揮 大阪フィルハーモニー交響楽団
（ベートーヴェン交響曲全曲演奏会）／**大阪文化祭賞**
日本センチュリー交響楽団
（センチュリー・ジャズ・ナイト Vol.3）／**奨励賞**
DANCE PROJECT 218.＜にいや＞　（HAMLET）／**奨励賞**

平成30年度 関西元気文化圏賞贈呈式

本庶（ほんじょ） 佑（たすく）氏に大賞を贈呈

ニューパワー賞は 関西経済同友会「企業所有美術品展実行委員会」

本庶 佑氏

文化・芸術・スポーツなどの分野で活躍し、関西から日本を元気に明るくした人や団体へ、感謝と一層の活躍を期待して贈られる「関西元気文化圏賞（関西元気文化圏推進協議会・松本正義会長、関西・大阪21世紀協会も構成員の一員）。その贈呈式が文化庁芸術祭賞贈呈式と合同で行われ、本庶佑氏（京都大学高等研究院副院長・特別教授、神戸医療産業都市推進機構理事長）に大賞が贈られました。

京都市出身の本庶氏は、免疫の司令塔であるT細胞に「PD-1」という免疫の働きを抑える分子を発見し、免疫療法の原理を実証。この研究をもとに革新的な治療薬「オプジーボ」が開発され、多くのがん患者に希望を与えたことで2018年ノーベル生理学・医学賞を受賞しました。

受賞者と主催者

また、将来性が期待できる人や団体に贈られるニューパワー賞は、関西経済同友会の企業所有美術品展実行委員会ほか2団体に贈られました。同実行委員会は2018年10月、関西の企業が所有する普段非公開の絵画を一堂に集めた展覧会を開催。子供たちへの「対話型鑑賞教育」や、地域の飲食店を巻き込んだ「福島アートバル」の開催など、今後の継続的な活動が期待されました。各賞の受賞者は次の通り。

大賞：本庶佑、**特別賞**：大阪桐蔭高等学校硬式野球部、アドベンチャーワールド、**ニューパワー賞**：関西経済同友会企業所有美術品展実行委員会、同志社香里高等学校ダンス部、スーパーキッズ・オーケストラ。（敬称略）

関西・大阪21世紀協会は、「助成と顕彰」、「関西・大阪ブランドの発掘と発信」、「伝統の進化と創造」の3つを事業の柱としています。その中から、今年2～6月に実施された事業のいくつかをご報告します。

北新地に福を呼び込む早春の風物詩
堂島薬師堂節分お水汲み祭り

2019年2月1日／堂島薬師堂、曽根崎新地一帯
主催：堂島薬師堂節分お水汲み祭り実行委員会

大阪・キタの活性化と水都大阪の再生をめざし、関西経済同友会の提言を受けて平成16年に始まった「堂島薬師堂節分お水汲み祭り」。平成最後となった今回は、節分が日曜日となるため、2日繰り上げて実施されました。

堂島薬師堂で奈良薬師寺の山田法胤長老らによる節分法要が行われる中、薬師寺で祈祷された「お香水（こうずい）」を僧侶たちが参拝者の竹筒護符に汲み清め、千客万来・開運招福・無病息災を祈願。隣接する堂島アバンザの特設会場では、僧侶たちによる「声明（しょうみょう）」の詠唱をはじめ、北新地芸妓衆による舞の奉納や北新地で働く女性たちによるお化け（仮装）が披露されました。

その後、弁財天の化身といわれる龍とともに、打打打団天鼓の和太鼓を先頭に総勢約150名の大行列が夜の北新地を練り歩きました。

堂島薬師堂でのお水汲み

北新地に繰り出す龍や北新地クイーン、「お化け」たちの一行

交流サロン21cafe〈2019年1月30日・3月13日／中之島センタービル〉

『未来社会に何を残す？ 大阪・関西万博を考えよう』

奥野卓司氏（〈公財〉山階鳥類研究所所長、関西学院大学名誉教授）

1970大阪万博では、梅棹忠夫氏や小松左京氏らが立ち上がり、開催テーマやレガシーについての戦略を立てました。奥野氏はそうした経緯を振り返り、2025大阪・関西万博についてもテーマの意味や未来へのレガシーについて、「関西の町民」の立場で柔軟に考えてみようと促しました。経済産業省は「常識を超えた万博」を掲げていますが、AI（人工知能）などはすでに常識の範囲内。そこで奥野氏は、上方文化などの文化価値を高め、万博によって世界へ発信すると同時に、一つの拠点から関連拠点へとリアルワールドのネットワークを拡大するとともにリアルとバーチャルをネットワークさせることを提案。また、自然や生物とAIといった最先端技術を融合させて日本文化の魅力を高めていくことも例示されました。

奥野卓司氏

『上町台地 ～ 悠久の歴史』　北川 央氏（大阪城天守閣館長）

古来、天皇の即位儀礼は、践祚（せんそ）（三種の神器の受け渡し）、即位（高御座への登壇）、大嘗祭（即位後初めての新嘗祭）の三つで構成されてきましたが、鎌倉時代初期までは、これに加えて「八十嶋祭（やそしまのまつり）」が浪速の地で行われていました。北川氏は、この祭りがなぜ行われたのか、なぜ浪速の地が祭りの舞台になったのかについて、5500年前の上町台地の地形と八十嶋祭の舞台となる生國魂神社の成り立ちに遡って解説。大阪が「浪速」と呼ばれたのは、上町台地の北端（現在の大阪城付近）が大阪湾と河内湾をつなぐ狭い海峡で、潮流が速かったことに由来することなどを、日本書紀・古事記の記載や地図を示して説明。大阪が国生み神話の舞台であったことを参加者とともに再認識し、新しい令和の時代に大阪を盛り上げていきたいとお話しされました。

北川 央氏

都会の中で行われる華やかなお田植え祭り
住吉大社 御田植神事（国指定重要無形民俗文化財）

6月14日／住吉大社（大阪市住吉区）

日本三大田植祭りの筆頭に上げられる「御田植神事」は、神功皇后が五穀豊穣を祈るため住吉大社に神田を設け、長門国（現在の山口県）から植女（うえめ）を召して御田植を奉仕させたのがはじまりとされています。明治時代に入って中断されましたが、大阪新町花街の協力で復活し、芸妓が植女となって神事廃絶の危機を救いました。現在は関西・大阪21世紀協会（上方文化芸能運営委員会）などが、大阪の伝統文化・神事芸能として支援しています。令和最初となる今回も、御田に設えた舞台で御稔女（みとしめ）による雨乞い祈願の神田代舞（みとしろまい）や、田の周囲で住吉踊り（無形文化財）などが賑やかに奉納されました。

神田代舞を奉納する高見瀧子さん

御田植風景

日本万国博覧会記念基金助成事業

2020年度の助成事業を募集します。

助成予定総額（国内事業、国外事業の総額）9,200万円

申請書受付期間：**2019年9月2日（月）～9月30日（月）** ※当日消印有効

日本万国博覧会記念基金

助成対象事業

2020年4月1日～2021年3月31日までに実施される事業で、万博の成功を記念するにふさわしく、「日本万国博開催の意図」の趣旨に適った国際相互理解の促進に資する活動（① 国際文化交流、国際親善に寄与する活動、② 教育、学術に関する国際的な活動）を対象とします。なお、2025年大阪・関西万博の開催に向け、1970年万博の理念を継承・発展させ、新たな時代の価値創造へとつなぐ活動を優先的に採択します。

助成金額の申請

助成対象事業費の合計の3/4以内を上限として、10万円単位で申請してください。

- **重点助成事業**…助成金1,000万円を上限として、数件程度採択を予定しています。（該当なしの場合もあります）
- **一般助成事業**…助成金300万円を上限として数十件程度採択します。

募集要項および申請書 ……当協会ホームページからダウンロードできます。 http://www.osaka21.or.jp/jecfund/information/

お問合せ・申請書送付先 …（公財）関西・大阪21世紀協会 万博記念基金事業部 ☎06-7507-2003
E-mail:jec-fund@osaka21.or.jp

Arts Support Kansai

古本・CDなどを集めるだけでアーティストを支援

ASKの「古本 de 寄付」スタート

アーツサポート関西は今年7月、中古品販売大手ブックオフコーポレーションと提携した「古本 de 寄付」を始めました。古本・CDなどを30点以上集めて箱詰めすれば、ブックオフ指定の配送会社が無料で集荷。買取金額はそのままASKへの寄付（一般公募助成の財源）となり、関西の若い芸術家の支援などに活用されます。

お申込み・お問合せなど、詳しくはホームページをご覧ください。
http://artssupport-kansai.or.jp/

- **WEB（またはFAX）で申し込み**
  古本 de 寄付 ASK　検索
- **箱詰め（30点以上）**
- **ご指定日時に配送会社が集荷**
- **ブックオフオンラインで査定（査定額が寄付金に!）**

ASKよりお礼のメールを送信

楽しむ 学ぶ 語り合う インフォメーション

アートストリーム2019

ART stream

2019年9月6日（金）～8日（日） 入場無料
12：00～20：00（6日）、10：00～18：00（7、8日）
大丸心斎橋店北館14階イベントホール

関西を中心に活躍する新進アーティストの展覧会＆マーケット。一般公募で選ばれた85組が出品します。

インターナショナル和食フォーラム（関西・大阪文化力会議2019）

2019年10月8日（火）14:00～17:00 入場無料
ドーンセンター（大阪府立男女共同参画・青少年センター）

和食の継承・普及や2025年大阪・関西万博に向けた提言など、さまざまな観点から専門家の意見を伺います。

関西・大阪21世紀協会賛助会員入会のお願い

関西・大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会　費（何口からでも結構です）
- ■法人会員1口につき年会費10万円
- ■個人会員1口につき年会費1万円

特　典
1. 協会が発行する刊行物の配布
2. 協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3. 賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ（公財）関西・大阪21世紀協会　総務部

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会
ホームページ http://www.osaka21.or.jp

発　行　日／令和元年（2019）8月9日
編集・発行／公益財団法人 関西・大阪21世紀協会
〒530-6691 大阪市北区中之島6丁目2番27号 中之島センタービル29階 TEL.（06）7507-2001 FAX.（06）7507-5945
発　行　人／佐々木洋三　編集協力／株式会社インサイト　印刷／東洋紙業株式会社